

甲府城下町遺跡 XIII

(中央4丁目144他)

—都市計画道路古府中環状浅原橋線街路事業に伴う発掘調査報告書—

2015

山梨県中北建設事務所
甲府市教育委員会
昭和測量株式会社

甲府城下町遺跡XIII

(中央4丁目144他)

—都市計画道路古府中環状浅原橋線街路事業に伴う発掘調査報告書—

2015

山梨県中北建設事務所
甲府市教育委員会
昭和測量株式会社

序

甲府のまちは武田信虎が、その居館を川田から躑躅が崎に遷したときから発展してまいりました。武田信虎・信玄・勝頼の三代、約60年におよぶ治世によって戦国時代の城下町として確立され、武田家滅亡後も一条小山に築かれた甲府城を中心に、甲斐国の政治・経済の中心を担ってまいりました。

本書では甲府城下町のなかでも、経済的に最も盛んであったといわれる柳町の一角の発掘調査について報告するものです。今後、調査事例を重ねることにより、「歴史物語都市甲府」の重層的な歴史の変遷が明らかにされるものと期待しております。

結びに、関係された方々のご理解とご協力により、調査を円滑に実施できたことに御礼を申し上げますとともに、本報告書が歴史や文化財理解の一助として広く活用されれば幸いです。

平成27年3月

甲府市教育委員会
教育長 長谷川 義高

例 言

1. 本書は、山梨県甲府市中央4丁目144他地点に所在する甲府城下町遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、都市計画道路古府中環状浅原橋線街路事業に伴うものであり、甲府市教育委員会が主体となり、業務委託を受けた昭和測量株式会社が実施した。
3. 調査及び整理作業は、甲府市教育委員会より委託を受けた昭和測量株式会社の泉英樹・高野高潔・小谷亮二が新津健の助言のもと行った。
4. 発掘調査は、平成25年7月29日から8月26日にかけて実施し、整理・報告書刊行業務は、平成26年6月2日から平成27年3月13日まで実施した。
5. 本書の執筆は、第1章第1節を甲府市教育委員会平塚洋一、第6章を公益財団法人山梨文化財研究所藤澤明、第2章・第5章第1節を小谷亮二が担当し、他は泉英樹が行った。
6. 発掘調査の基準点測量は昭和測量株式会社が行った。出土遺物の保存処理及び自然科学分析は公益財団法人山梨文化財研究所が行った。
7. 遺跡におけるX・Y座標は世界測地系座標を使用している。
8. 発掘調査および報告書の作成にあたり次の方々にご教示と御協力を賜った。記して謝意を表する。(順不同、敬称略)
鈴木稔 畑大介 藤澤明 堀内秀樹 宮里学
9. 本調査における図面・写真・遺物はすべて甲府市教育委員会で保管している。

凡 例

本書における遺構・遺物の表示は以下の通りである。

1. 遺構・遺物の挿図の縮尺は、各図にスケールバーで表示した。
2. 遺構平面図の方位はすべて図面上を座標北とした。
3. 遺物番号は、報告書を通して連番で付した。遺物分布図・観察表および本文中の番号はそれぞれ対応している。
4. 遺構及び遺物の色調は、『新版標準土色帖2010年版』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づいた。
5. 断面図中の数値は、海拔高度（T.P.）を示す。
6. 発掘調査で検出された遺構については以下の遺構記号を使用し、遺構ごとに連番で番号を付した。本報告でも一部を除いては新たな番号を付与せず、発掘調査時点のものを使用した。
S B：礎石建物跡 S D：溝状遺構 S K：土坑 S X：碟溝・不明遺構
7. 遺物実測図に使用したスクリーントーンは以下の通りである。



欠損部



煤・炭化物

目次

第1章 調査の経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の方法と基本層序	
第1節 調査の方法	6
第2節 基本層序	6
第4章 遺構と遺物	
第1節 礎石建物跡 (SB)	10
第2節 土坑 (SK)	10
第3節 上水 (SD)	13
第4節 その他の遺構 (SX)	13
第5章 まとめ	
第1節 土地利用の変遷	40
第2節 各遺構面の様相	44
引用・参考文献	46
第6章 自然科学分析	47

挿図目次

第1図 遺跡の位置・周辺の遺跡分布図	3
第2図 調査区位置図	4
第3図 基本層序	7
第4図 第1～3遺構面全体図	8
第5図 第4・5遺構面全体図	9
第6図 礎石建物 (SB1)	15
第7図 土坑 (1)	16
第8図 土坑 (2)	17
第9図 土坑 (3)・不明遺構	18
第10図 土坑 (4)	19
第11図 土坑 (5)・不明遺構	20
第12図 土坑 (6)・磔溝	21
第13図 上水	22
第14図 遺構出土遺物 (1)SK1・3	23
第15図 遺構出土遺物 (2)SK6・13・19・20	24
第16図 遺構出土遺物 (3)SP・SX	25
第17図 遺構外出土遺物 (1)第1・2遺構面	26

第18図	遺構外出土遺物(2)第1・2遺構面	27
第19図	遺構外出土遺物(3)第1～3遺構面	28
第20図	遺構外出土遺物(4)第3遺構面	29
第21図	遺構外出土遺物(5)第4遺構面	30
第22図	遺構外出土遺物(6)第4遺構面	31
第23図	遺構外出土遺物(7)第4遺構面	32
第24図	遺構外出土遺物(8)第5遺構面	33
第25図	出土遺物 木製品(1)	34
第26図	出土遺物 木製品(2)	35
第27図	「(一)柳町家持表口間数御改帳」配置図	40
第28図	『甲州道中分間延絵図』(山梨県立図書館蔵)	41
第29図	「馬車路線が走る柳町通り」	42
第30図	明治・大正期の調査地点図(明治32年・大正11年以前)	43

表目次

第1表	周辺の遺跡	5
第2表	遺物観察表(1)	36
第3表	遺物観察表(2)	37
第4表	遺物観察表(3)	38
第5表	遺物観察表(4)	39

写真図版

図版1	第1・2遺構面完掘、第3遺構面完掘 第4遺構面完掘、第5遺構面完掘
図版2	第5遺構面完掘 方形礎石建物検出、礎石下部杭検出 S B 1 検出、S P 4・6 検出 S P 1・3 検出、S P 6 遺物出土状況
図版3	S K 1 遺物出土状況・完掘 S K 2 セクション・完掘 S K 3 遺物出土状況・完掘 S K 4 完掘、S K 5 完掘
図版4	S K 6 セクション・完掘 S K 7 礎検出・完掘 S K 12 完掘、S K 13 セクション・完掘・建築部材
図版5	S K 14 検出・完掘 S K 15 セクション・完掘 S K 16 完掘・掘り方 S K 17 セクション・完掘

- 図版 6 S K 19 遺物出土状況
S K 20 遺物出土状況・完掘
S K 21 完掘、S K 22 セクション
S K 22 完掘、S K 23 セクション
- 図版 7 S K 23 完掘、S K 24 セクション
S K 24 完掘、S K 25 セクション
S K 25 完掘、竹樋検出
S X 2 検出、S X 3 検出
- 図版 8 S X 1 5 完掘、S X 16 遺物出土状況
S X 16 完掘、S X 17 検出
S X 17 セクション・被熱硬化面検出
第 3 面遺物出土状況
- 図版 9 第 3 遺構面遺物出土状況
第 4 遺構面遺物出土状況
- 図版 10 第 4 遺構面遺物出土状況
第 5 遺構面遺物出土状況
調査前現況
調査区北半部全景、南半部全景
調査後状況
- 図版 11 S K 1・3 出土遺物
- 図版 12 S K 6・13・19・20 出土遺物
S P 5・6 出土遺物
S X 2・3・4・16 出土遺物
- 図版 13 第 1・2 遺構面出土遺物
- 図版 14 第 1～3 遺構面出土遺物
- 図版 15 第 3 遺構面出土遺物
- 図版 16 第 4 遺構面出土遺物
- 図版 17 第 4 遺構面出土遺物
- 図版 18 第 5 遺構面出土遺物
- 図版 19 木製品 (1)
- 図版 20 木製品 (2)

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

甲府市中央4丁目144他地点は、江戸時代には甲府城下町を区画する二の堀の東側、柳町二丁目に位置する。甲州街道に面しこの付近が柳町宿の本陣および脇本陣であったと推定される。柳町は江戸時代を通して甲府城下において最も人口が多く、隣接する八日町、三日町などと共に商業の中心であった。

都市計画道路「古府中環状浅原橋線」街路事業に伴い、道路の拡幅が計画されたことから、対象地に試掘調査を実施してきた。その結果、中央4丁目144他地点の北側及び南側の5区域6地点において、平成24年11月から同25年2月にかけて本発掘調査を実施した。また相前後して東側に隣接する個人住宅の新築予定地では、試掘調査の結果多量の陶磁器が出土したことから本発掘調査を実施していた。その調査では獣骨や貝殻なども出土し、宿場だったことを裏づけるような遺物も出土していた。

中央4丁目144他地点における試掘調査を平成25年6月に実施した結果、地表下80cm付近から、多量の焼土と炭化物が出土したため、本発掘調査の必要があると判断し、本格的な発掘調査に至った。

第2節 調査の経過

発掘調査は平成25年7月29日から8月26日まで実施した。調査前の現況は、調査区の東側で宅地建設が始まっており、南北では古府中環状浅原橋線街路事業の共同溝埋設工事が進行している状況であった。調査は宅地建設の進入路確保のため、調査区を南北に二分して初めに北半部を調査し、埋め戻し後、南半部の調査を行うこととした。7月29日に調査区の設定作業および調査区周りの安全柵と仮設トイレの設置を行い、発掘機材を搬入した。30日にバックホウで機械掘削を行い、当日中に終了して翌日から人力掘削を開始した。その後、調査を進める過程で下層にも遺構面が存在することが推定され調査が必要であると判断されたため、協議を行い、下層についても調査を行った。北半部では5面の遺構面を確認した。9日までに北半部の調査が終了し、バックホウによる埋め戻しを行って、10日に南半部の機械掘削を行った。南半部でも5面の遺構面を確認し、8月20日までに現場調査を終了し、仮設トイレおよび現場機材を撤収した。翌21日には碎石を搬入して埋め戻しを行い、安全柵を撤去して現場を明け渡した。その後、8月26日まで基礎整理を行い、発掘調査を終了とした。

整理作業は平成26年6月2日から平成27年3月13日まで行った。出土遺物の水洗・注記・接合を順次行って、7月22日に土器・陶磁器の実測作業を開始し、必要なものに関しては拓本の採取を行った。7月24日には金属製品・木製品について公益財団法人山梨文化財研究所に保存処理を委託した。8月11日からは遺物の写真撮影および遺物実測図のデジタルトレースと遺構図の編集作業を開始した。平成27年1月16日から挿図・写真図版の作成と本文の原稿執筆を開始し、挿図や写真図版の修正を加えつつ、2月末までに原稿の執筆を終了した。本報告書は平成27年3月に刊行された。

【調査体制】

調査担当者	平塚洋一（甲府市教育委員会）、 泉 英樹・高野高潔・小谷亮二（昭和測量株式会社文化財調査課）
整理作業助言	新津 健（昭和測量株式会社文化財調査課）
発掘補助員	新谷博朋・大森ふじの・大森透江・田中孝雄
整理補助員	上島光子・大森透江・小澤美幸・栗田かず子・齊藤里美・広瀬ありさ・藤原由香・ 三木一恵・渡辺麗子

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境（第1図）

甲府城下町遺跡は、甲府盆地の北縁部に位置し、16世紀末から造営された近世城下町である。城下町は、盆地の北部山地から注ぐ相川によって形成された扇状地の扇端部に位置している。相川は、奥秩父山塊に続く太良峠に水源を持ち、市内の寿町付近で荒川と合流して甲府盆地を南流した後、笛吹川と合流する河川である。甲府城下町は、西側に相川、南側に荒川、北東側に愛宕山の縁辺部を東へ走る藤川が流れ、それらの河川に囲まれた範囲に立地している。愛宕山（標高423m）から西南方向には、甲府城が築かれた一条小山（標高304m）が連なっている。

調査地点は、甲府市街を南北に走る都市計画道路「古府中環状浅原橋線」（通称：遊竜通り）沿いの銀座通り東交差点付近（甲府市中央4丁目）に所在する。甲府城下町の南東部に位置し、甲府城の三の堀に囲まれた町屋に該当する。甲府城下町遺跡の扇状地斜面は、標高260m～300mを測るが、調査地点の標高は、現況高263.9mで、調査を行った遺構面で262.6～263.2mである。

第2節 歴史的環境（第1・2図、第1表）

縄文時代～平安時代 甲府盆地および盆地の北から東に位置する丘陵には、縄文時代～近世に至るまで多くの遺跡が分布している。甲府城下町およびその周辺における調査では、縄文時代～平安時代の遺構は検出されないものの遺物は出土している。ただし扇状地上の他の遺跡では、弥生時代から古墳時代あるいは平安時代までの複合遺跡があり、盆地の南側でも多くの古墳時代の遺跡が分布する。扇状地という立地条件や河川の流路の変動、中・近世における土地利用改革の影響を受けなければさらに多くの遺跡が分布していたと思われる。

中世 武田氏居跡（21）は永正16（1519）甲斐守護の武田信虎によって築かれた方形居館である。国指定史跡となっており、広さは周囲の堀を含め東西約200m、南北約190m、面積は約4.6万㎡と推定される。堀と土塁により構成される東国の中世居館で、甲斐武田氏の城郭の特徴がよく現れた構造になっている。2006年の発掘調査においては大手にある石塁下層から三日月形の堀跡が確認された。

近世 甲府城下町遺跡（1）は、一条小山に総石垣の平山城として整備された甲府城の周囲に、三重の堀を巡らせて区画した城下町である。二の堀の内側は武家屋敷地、その外側は町人地とされ、また荒川より取水した甲府上水が敷設されていた。17世紀代の幕府直轄領時代、18世紀初めの柳沢支配の時代を経て、再び幕府の治めるところとなり、幕末まで甲府勤番が設置された。調査地点は二の堀と三の堀の間の町人地に該当し、金座が所在していたとされる場所にほど近い。調査地点の北約50mの地点で、近年行われた調査では、金の精錬にかかる遺物がみつまっている。永慶寺跡（26）は、柳沢吉保の菩提寺として建立された。寿町遺跡（65）は江戸時代には甲州街道が区域内を東西に貫通しており、街道沿いは飯田新町などの町屋が存在していた。昭和62年の試掘調査では江戸期以降の敷石と遺物が出土している。



第1図 遺跡の位置・周辺の遺跡分布図

S=1/25000



第2図 調査区位置図

第1表 周辺の遺跡

番号	遺跡名	時代	種別
1	甲府城下町遺跡	近世	集落跡
2	甲府城跡	近世	城館跡
3	湯村山6号墳	古墳時代	古墳
4	湯村山城跡	中世	城館跡
5	湯村山5号墳	古墳時代	古墳
6	湯村山4号墳	古墳時代	古墳
7	湯村山3号墳	古墳時代	古墳
8	湯村山2号墳	古墳時代	古墳
9	湯村山1号墳	古墳時代	古墳
10	万寿森古墳	古墳時代	古墳
11	和田無名墳	古墳時代	古墳
12	緑ヶ丘二丁目遺跡	古墳～平安	古墳
13	緑ヶ丘一丁目遺跡	古墳時代	散布地
14	三光寺山遺跡	古墳時代	古墳
15	村之内遺跡	古墳・平安	散布地
16	向田A遺跡	弥生～古墳	散布地
17	向田B遺跡		散布地
18	長閑遺跡	中世	包蔵地
19	峰本南B遺跡	近世	散布地
20	峰本南A遺跡	近世	寺院跡
21	田代氏館跡	中世	城館跡
22	郡郷ヶ崎亭跡	中世	城館跡
23	武田城下町遺跡	中世	集落跡
24	大手下遺跡	縄文時代	散布地
25	岩窪C遺跡	古墳時代	散布地
26	永慶寺跡	中世	寺院跡
27	中道東遺跡	近世	散布地
28	中道西遺跡	古墳時代	散布地
29	岩窪遺跡	奈良・平安・中世	包蔵地
30	山梨大學遺跡	奈良・平安	包蔵地
31	八幡神社遺跡	縄文時代	散布地
32	コッ塚古墳	古墳時代	古墳
33	二ッ塚2号墳	古墳時代	古墳
34	二ッ塚1号墳	古墳時代	古墳
35	二ッ塚3号墳	古墳時代	古墳
36	富士見遺跡	古墳・平安	散布地
37	塩部遺跡	弥生～平安	包蔵地
38	新紺屋小学校遺跡	近世	散布地
39	御崎田遺跡	平安時代	散布地
40	大笠山水の元遺跡	古墳時代～	散布地
41	亥ノ兎遺跡	平安時代～	散布地
42	大六天遺跡	平安時代～	散布地
43	地蔵北遺跡	古墳～平安	散布地
44	富士見遺跡	古墳・平安	散布地
45	銀杏之本遺跡	平安～近世	散布地
46	堤下無名1号墳	古墳時代	古墳
47	堤下B遺跡	平安時代～	散布地
48	善光寺塚2号墳	古墳時代	古墳
49	善光寺塚1号墳	古墳時代	古墳
50	北善光A遺跡	平安時代～	散布地
51	堤下A遺跡	平安時代～	散布地
52	北原遺跡	縄文・平安	集落跡
53	善光寺裏遺跡	縄文・平安～	散布地
54	南善光B遺跡	古墳～平安	散布地
55	宮の脇A遺跡	縄文・平安～	散布地
56	宮の脇B遺跡	縄文・平安～	散布地

番号	遺跡名	時代	種別
57	殿屋敷遺跡	平安時代～	散布地
58	上郷遺跡	平安時代～	散布地
59	本郷遺跡	縄文・古墳～	包蔵地
60	東光寺遺跡	平安時代～	散布地
61	宮の前遺跡	縄文時代	散布地
62	本郷B遺跡	平安時代～	散布地
63	本郷C遺跡	古墳～中世	散布地
64	宝町遺跡	縄文・平安	包蔵地
65	寿町遺跡	古墳時代～	包蔵地
66	上石田B遺跡	平安時代	散布地
67	上石田遺跡	縄文時代	集落跡
68	上河原遺跡	平安時代～	散布地
69	渋沢遺跡	平安時代～	散布地
70	大北河原遺跡	平安時代	散布地
71	久保北河原遺跡	平安時代	散布地
72	渋沢遺跡	平安時代～	散布地
73	秋山氏館跡	中世	城館跡
74	千松院遺跡	中世～	散布地
75	伊勢町遺跡	古墳時代	包蔵地
76	食糧工場遺跡	縄文・弥生	包蔵地
77	木俣遺跡	近世	散布地
78	殿舟院跡	中世	寺院跡
79	住吉天神遺跡	古墳～平安	散布地
80	太田町遺跡	古墳時代～	包蔵地
81	青沼遺跡	古墳時代	包蔵地
82	青沼三丁目遺跡	中世～	散布地
83	湯田一丁目遺跡	古墳時代	散布地
84	幸町A遺跡	弥生時代	包蔵地
85	幸町B遺跡	古墳時代	散布地
86	朝気遺跡	縄文～平安	集落跡
87	南口町A遺跡	平安時代	散布地
88	南口町B遺跡	平安時代	散布地
89	里吉天神遺跡	古墳～平安	散布地
90	中坪遺跡	古墳時代	散布地
91	家之前遺跡	平安時代	散布地
92	十丁遺跡	古墳時代	散布地
93	十丁B遺跡	古墳時代	散布地
94	字前A遺跡	古墳時代	散布地
95	字前B遺跡	古墳時代	散布地
96	字前C遺跡	古墳時代	散布地
97	村之内遺跡	古墳～平安	散布地
98	北風遺跡	古墳～平安	散布地
99	油田遺跡	平安時代	散布地
100	野村遺跡	古墳～平安	散布地
101	大板遺跡	平安時代	散布地
102	青葉町遺跡	平安時代	散布地
103	厨村遺跡	近世	散布地
104	湖之上遺跡	古墳時代	散布地
105	外河原デクヤ遺跡	古墳～平安	散布地
106	二又遺跡	古墳時代	包蔵地
107	明石西河原遺跡	平安時代	散布地
108	上町天神遺跡	古墳～平安	散布地
109	大土井遺跡	平安時代	散布地
110	宮田遺跡	弥生・平安	散布地
111	住吉天神遺跡	古墳～平安	散布地
112	小宮氏館跡	中世	城館跡

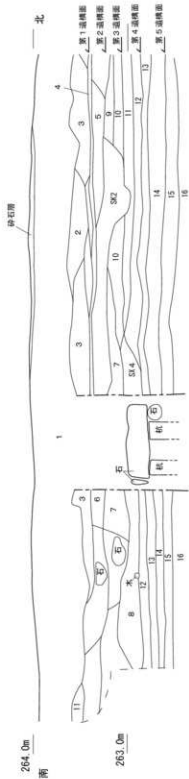
第3章 調査の方法と基本層序

第1節 調査の方法

発掘調査は、調査期間中も調査区内に別工事の進入路を確保する必要があったため、調査区を南北に二分して北半部から着手し、埋め戻し後、反転して南半部の調査を行うこととした。掘削は表土の除去など部分的に重機を用いた以外は人力で行った。遺構面の重なりは調査区の壁際にサブトレンチを設定し土層観察を行いながら掘り下げて確認した。確認した遺構面は第1から第5遺構面までの5面である。第1遺構面については、土層観察で確認できたが大きく攪乱されており、遺構検出が困難であったため、第2遺構面まで掘り下げて遺構検出面とし、第1遺構面の遺構と第2遺構面の遺構を混在する形で検出した。本報告でも遺構図や写真について詳細に遺構面を分けずに、便宜上、第1・2遺構面として記録することとした。第2遺構面以下の遺構面については、10cmから20cmほど下がるごとに固く締まった整地面が確認され、それぞれの整地面を精査しながら掘り下げて遺構を検出し、記録を行った。北半部では第5遺構面で遺構と遺物が確認されず、南半部でも第5遺構面で遺構と遺物が極めて希薄となったため、サブトレンチで下層確認を行った上で、それぞれこの面で調査を終了した。遺構の測量は、土層断面は手実測にて行い、平面図はトータルステーションによる測量と手実測、写真測量を併用した。遺物はトータルステーションを使用して位置を記録して取上げ、小片については各遺構又は遺構面ごとの一括取上げ遺物とした。トータルステーションはNikon-Trimble FALDY-EN3を使用し、図化計算ソフトはCADIOS+を用いた。また、遺構・遺物の写真撮影には35mm一眼レフカメラ(Nikon F 80)とデジタル一眼レフカメラ(Nikon D 7000)を併用した。

第2節 基本層序(第3図)

基本層序は、調査区の西壁および北壁・南壁をそれぞれ精査して観察した。調査区北半部の西壁を図示した。現況地盤から30～40cmほどの厚さの第1層の礫層は、アスファルト舗装下の整地層である。その下の第3層では、焼土が20cmほどの層厚で堆積しており、昭和20年7月の甲府空襲によるものとみている。第4層は灰色砂質シルトで、戦災以前の生活面(第1遺構面)と推定されたが、遺構は第2遺構面上で確認している。第5・6層は焼土層で、火災後の整地などに伴うものと推測された。江戸時代後半の遺物が出土している。第7層は黒褐色砂質シルト層で、その上面を第2遺構面とした。第9層は、調査区北半部のみで検出された。径2～3mmの灰白色粗砂を多く含む特徴的な層である。第10層の黄灰色粘土をはさみ、第11層は黒褐色粘土質シルトの固く締まった層で、その上面を第3遺構面とした。層厚は10cmほどである。第12層はオリブ黒色粘土で、締まりはゆるい。第13層はオリブ黒色粘土で非常に固く締まっており、この上面を第4遺構面とした。第14層はオリブ黒色粘土で、締まりはゆるく遺物の出土が少ない。その下の第15層は黒色粘土で固く締まっており、この上面を第5遺構面とし、精査して遺構と遺物の検出を試みたが、北半部・南半部ともにほとんど確認されなかった。以上のように第3遺構面以下は、固く締まった整地層と比較的締まりのゆるい層が10cm～20cmの厚さで互層状に堆積しており、固く締まった整地層の上面を生活面と想定し、精査しながら掘り下げて遺構検出を行った。第1・2遺構面で江戸時代後半、第3～5遺構面では江戸時代前半の時期の遺物が主として出土している。調査前の現況地盤の標高は263.9mで、第1・2遺構面は263.2m、第5遺構面は262.6mを測る。それぞれの遺構面はほぼ平坦である。



調査区北半部西壁

1. 整地層 (φ200mm程の礫多く混入)

2. 5Y4/1灰色砂質シルト

3. 10YR3/2黒褐色砂質シルト (焼土ブロック40%含む、層の下位に炭化物層が0.5cm)

4. 2.5YR4/2暗灰色粘土質シルト

5. 10YR4/1褐色砂質シルト (焼土ブロック10%含む)

6. 10YR3/2黒褐色砂質シルト (焼土粒状に3%含む、炭化物粒状に3%含む)

7. 10YR2/3黒褐色砂質シルト (風化した砂岩の塊含む)

8. 5Y4/1灰色粘土 (炭化物粒状に1%含む)

9. 2.5Y7/1灰白色粗砂 (φ2~3mmの粗砂が薄く埋まる)

10. 2.5Y6/1黄灰色粘土

11. 10YR3/1黒褐色粘土質シルト (固く締まる)

12. 5Y3/1オリーブ黒色粘土

13. 7.5Y3/1オリーブ黒色粘土 (非常に固く締まる)

14. 5Y3/1オリーブ黒色粘土 (締りゆるい)

15. 2.5Y2/1黒色粘土 (固く締まる)

16. N3/暗灰色粘土質シルト (φ5mm程の礫5%含む)

第3図 基本層序



第1・2遺構面全体図



第3遺構面全体図



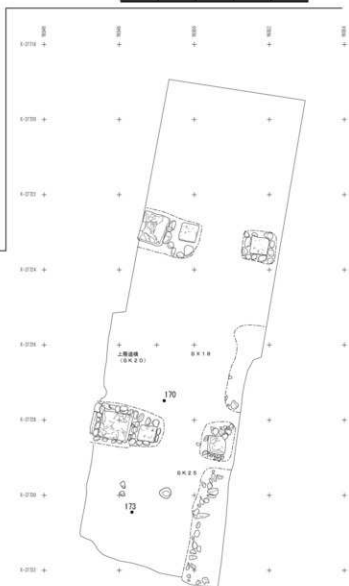
第4図 第1～3遺構面全体図



第4遺構面全体図



第5遺構面全体図



第5図 第4・5遺構面全体図

第4章 遺構と遺物

第1節 礎石建物跡(SB)

第1・2遺構面上と第4遺構面上で2軒の建物跡を検出した。第1・2遺構面上で検出した建物跡について、遺構番号は付与していないが概略を記載する。

第1・2遺構面上で、方形に巡る大小の方形礎石を合わせて6基と礎溝を検出した(第4図)。大型の礎石は調査区西壁に沿うようにして2基検出され、それぞれ小型礎石と一対となっている。大型礎石は一辺80cmほどの正方形に成形され、厚さは15cmほどである。礎石の上下で栗石が検出され、下部の栗石の下にさらに4本1組の杭が打ち込まれた構造となっている。杭の頭には鉄の丸釘を確認した。小型の礎石は4基あり、礎石の一辺が50cmほどである。下部には拳骨大ほどの栗石が込められているが、杭は確認されなかった。小型礎石の柱間は南北で5.6m、東西で1.8mを測る。礎溝は調査区南半部で検出され、上端部から約1mにわたって礎が込められている。礎の最低面では、部分的ではあるが礎を支えるように胴木が数本埋設されていた(第5図)。これらの構造物が建物の基礎とすれば、かなり重量のある建物であったと推測する。調査区壁面の土層観察では、少なくとも戦後までは存在していたと思われる。

SB1(第6・16図)

調査区北半部の第4遺構面上で検出した。SP1~6の6基の礎石で構成され、東西1間(1.8m)、南北2間で検出された。主軸はN-11°-Eを指す。礎石は長軸が40cmほどの不整形で平らな自然石を用いている。礎石の下部には栗石や杭は確認されなかったが、SP6のみ礎石の周りに拳骨大の石が囲むように据えられており、他の礎石についても同様の構造であった可能性はある。それぞれの礎石の上端は、南北軸ではほぼ平坦であるが、東西軸では、わずかに東側が低くなっている。遺物はSP5で磁器の碗(36)、SP6の礎石と栗石の間から陶器の天目碗(37)などが出土している。切り合いでは、SP4がSK16に先行する。時期は、出土遺物や切り合いから江戸時代前半と考える。

第2節 土坑(SK)

SK1(第7・14図)

調査区北半部の第1・2遺構面で検出され、SK2の北側に隣接する。平面形は方形を呈すと推測される。検出された長軸は1.8m、短軸1.0m、深さ10cmを測る。埋土は、黒褐色砂質シルトに焼土塊と炭化物を含む。上層部分は削平されて底面付近のみが遺存する。調査区の北・西壁の土層観察から、上層部分は埋土が同様であるSK2・3などと一つにつながっていたと考えられる。SK1~3では、埋土に明赤褐色の焼土塊や炭化物、焼けた瓦なども含まれていたが、戦災焼土層より下位で検出しており、戦災以前の火災で生じた瓦礫ゴミなどを焼け跡に残った窪みなどにまとめて投棄し、整地したものではないかと推測する。出土遺物は、磁器(1~3)、陶器(4~6)、碁石(7)、「寛永通寶」(8)、平瓦(9~12)がある。時期は、出土遺物から江戸時代後半と考える。

SK2(第7図)

調査区北半部の第1・2遺構面で検出され、SK1の南側に隣接する。平面形は不整形である。検出された長軸は1.3mで、短軸1.2m、深さ14cmを測る。埋土はSK1・3と同様で火災による瓦礫ゴミなどが投棄された土坑であると推測する。出土遺物は図示していないが、磁器や陶器の碗がある。

SK3 (第7・14・25図)

調査区北半部の第1・2遺構面で検出され、SK2の南東側に隣接する。平面形は不整形で、長軸1.6m、短軸1.3m、深さ15cmを測る。埋土はSK1・2と同様で、火災による瓦礫ゴミなどが投棄された土坑であると推測する。出土遺物は、磁器(13～19)、陶器(20～24)、土器(25)、古銭(26・27)、木製品(178～195)がある。15の碗には焼き継ぎがみられる。26は「寛永通寶」、27は「紹聖元寶」である。木製品では桶の蓋(178・179)にはそれぞれ栓が遺存しており、178には焼印がみられる。

SK4 (第7図)

調査区北半部の第1・2遺構面で検出した。平面形は調査区外に延びるため不明で、検出された長軸は1.1m、短軸35cm、深さ29cmを測る。埋土はSK1～3と同様であるが、焼土が塊状ではなく粒状に含まれる。出土遺物は図示していないが、磁器・陶器がある。切り合いでは、SK5よりも新しい。時期は、埋土の特徴などから江戸時代後半と考える。

SK5 (第7図)

調査区北半部の第1・2遺構面で検出した。平面形は楕円形で、長径52cm、短径34cm、深さ10cmを測る。埋土は黒褐色粘土である。径10cmの礫が5個据えられており、柱の基礎の栗石であった可能性がある。石の下に杭などは確認できなかった。埋土に焼土が含まれず、第2遺構面に属する遺構である。出土遺物はなく、切り合いではSK4に先行する。時期は、江戸時代後半と推測する。

SK6 (第7・15図)

調査区北半部の第1・2遺構面で検出した。平面形は楕円形で、長径76cm、短径56cm、深さ6cmを測る。埋土は黒褐色砂質シルトに焼土塊と炭化物を含み、第1遺構面に属する遺構である。出土遺物は、陶器の皿(28)が1点出土している。時期は、出土遺物や埋土の特徴などから江戸時代後半と考える。

SK7 (第7図)

調査区北半部の第1・2遺構面で検出した。平面形は不整形で、長軸80cm、短軸70cm、深さ14cmを測る。埋土は褐灰色粘土に炭化物を含む。第2遺構面に属する遺構と考えられる。出土遺物はない。

SK12 (第8図)

調査区北半部の第3遺構面で検出した。一部を現代の方形礎石によって攪乱されているが、平面形は楕円形と推測する。長径58cm、短径50cm、深さ22cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトに焼土粒・炭化物を含む。また、径2～3mmほどの石灰質の白色粗砂粒を多く含んでおり、この砂粒は第3遺構面の北東部分にのみ、ごく薄く敷き詰めたように堆積していたものである。出土遺物はないが、埋土の特徴などから時期は、江戸時代前半と推測する。

SK13 (第8・15図)

調査区北半部の第3遺構面で検出した。平面形は不整形で、長軸2.4m、短軸70cm、深さ4cmを測る。埋土は径2～3mmの石灰質の白色粗砂粒で、焼土粒・炭化物を含む。深さがなく、地形の浅い窪みのように考えられたが、SK13内では石灰質の白色粗砂粒が濃密に検出されたため、その範囲として記録した。出土遺物は、磁器の皿(29)、陶器の皿(30)、古銭(31・32)で、31は「淳熙元寶」、32は「治平元寶」である。時期は、出土遺物などから江戸時代前半と考える。

S K 14 (第8図)

調査区北半部の第3遺構面で検出した。平面形は、大部分が調査区外に延びるため不明である。長軸2.4m、短軸50cm、深さ4cmを測る。埋土は橙色砂質シルトの焼土層で、炭化物を含む。この焼土層は、第1・2遺構面で検出された火事の影響が想定される遺構の焼土の状況とは異なり、非常に薄く堆積しており、焼土塊もほとんど観察されなかった。出土遺物は図示していないが、陶器と貝の破片がある。切り合いではS X 4 (石列)に先行する。時期は江戸時代前半と推測する。

S K 15 (第8図)

調査区北半部の第3遺構面で検出した。平面形は楕円形で長径64cm、短径54cm、深さ20cmを測る。埋土は橙色砂質シルトで、砂岩を多く含み固く締まる。出土遺物がなく、時期は不明である。

S K 16 (第8図)

調査区北半部の第4遺構面で検出した。平面形は楕円形で、長径54cm、短径42cm、深さ24cmを測る。埋土は、上層は褐灰色砂質シルトに焼土と石灰質の白色粗砂粒を多く含み、下層は被熱して岩石状の塊となっており、非常に硬い。この塊を取上げて断面観察したところ、径2cmほどの小石や植物の繊維、石灰質の塊が多く観察された。被熱の状況や石灰質の塊などからS K 16は炉で、塊や白色粗砂粒は金属の精製過程などで生成された溶融スラグのようなものではないかと推測している。蛍光X線分析では、鉄分が検出されたものの通常の土壌に含まれる程度で、特定の金属は検出されていない。他に出土遺物はなく、切り合いではS P 4より新しい。第4遺構面で検出したが、埋土の特徴などから第3遺構面に属する遺構で、時期は江戸時代前半と推測する。

S K 17 (第9図)

調査区南半部の第4遺構面で検出した。東半部を攪乱されるため平面形の全容は不明であるが円形または楕円形を呈すると推測する。長径は70cm、深さ9cmを測る。埋土は上層が灰層(黄灰色細砂)で、下層は被熱したにぶい赤褐色細砂に灰が混じっており、炉に関連する遺構と考える。出土遺物はなく、切り合いでは近現代の建物基礎に攪乱される。埋土から第3遺構面の時期に属する遺構で、時期は江戸時代前半と推測する。

S K 18 (第9図)

調査区南半部の第4遺構面で検出した。調査区外に延びるため平面形の全容は不明で、長軸1.8m、短軸86cm、深さ10cmを測る。埋土は、灰黄褐色砂質シルトで風化した砂岩を含む。出土遺物はなく、切り合いではS X 15より新しいが、時期は不明である。

S K 19 (第9・10・15・26図)

調査区南半部の第4遺構面で検出した。平面形は楕円形で、長径42cm、短径32cm、深さ12cmを測る。埋土は、オリブ黒色粘土で風化した砂岩を含む。出土遺物は鯉瓦(33)、骨角製の簪(34)があり、出土状況から一括で埋納された可能性が高い。鯉瓦は、鯉の鱗にあたる部品で、本体に挿し込んで装着するタイプである。瓦の表面はややくすんだ黒色で、半円状の鱗模様を手描きで陰刻されている。顕微鏡観察では、表面に金箔等は確認されなかった。検出したのは第4遺構面であるが、埋土の観察からは第3遺構面に属する遺構と考えられた。

また、出土状況図では他に木質遺物(196)と錆の塊を図示した。木質遺物については、出土位置の埋土が著しく異なっており、S K 19を掘り抜いた下層の遺物と判断した。製品の可能性はあるが、腐食が進んでおり加工の痕跡は認められなかった。錆の塊は取上げて観察し、自然遺物と判断した。S K 19付近は酸化鉄分が多く認められ、他にも錆の塊が検出されている。

S K 20 (第9・10・15・26 図)

調査区南半部の第4遺構面で検出した。平面形は円形で、径65cm、深さ67cmを測る。埋土は黒褐色粘土である。掘削した底面付近で棒状や板状の木製品(197～201)、約30cmほどの自然石が出土しており、石は投棄されたものと考えられる。湧水は少ない。調査区西壁に沿って位置しており、安全上の観点から断割調査は行わなかったが、井戸であった可能性がある。出土遺物は陶器の灯明皿(35)がある。調査区西壁の観察から第3遺構面に属する遺構で、時期は江戸時代前半と推測する。

S K 21 (第9 図)

調査区南半部の第4遺構面で検出した。平面形は不整形で、長軸1.0m、短軸70cm、深さ10cmを測る。埋土は灰黄褐色砂質シルトで、風化した砂岩を多く含む。出土遺物は、図示していないが土器の小破片が1点出土している。

S K 22 (第11 図)

調査区南半部の第4遺構面で検出した。平面形は楕円形で長径44cm、短径36cmを測る。埋土は黒褐色砂質シルトである。出土遺物はなく、切り合いではS X 17に先行する。

S K 23 (第11 図)

調査区南半部の第4遺構面で検出した。平面形は楕円形で、長径74cm、短径72cm、深さ20cmを測る。出土遺物はない。

S K 24 (第11 図)

調査区南半部の第4遺構面で検出した。平面形は不整形で、長軸74cm、短軸72cm、深さ20cmを測る。出土遺物はない。

S K 25 (第12 図)

調査区南半部の第5遺構面で検出した。平面形は円形で、径40cm、深さ30cmを測る。埋土はオリブ黒色粘土質シルトで10cm大の礫を多く含み、締まりは非常にゆるい。出土遺物はない。

第3節 上水(S D)

S D 1 (第11・13 図)

調査区南半部の第4遺構面で検出した。主軸方向はN-72°-Wを指す。東端は攪乱されて途切れるが、西端は調査区外へ延びる。長さ3.0m、幅44cm、深さ15cmを測る。埋土は、オリブ黒色粘土で、締まりは非常にゆるい。竹管の径は6cmほどである。竹管の傾斜は、東に向かってゆるやかに下がっている。出土遺物はないが、調査区西壁の土層観察から第4遺構面に属する時期の遺構であり、第4遺構面の出土遺物は江戸時代前半を主体としている。

第4節 その他の遺構(S X)

S X 2 (第12・16 図)

調査区北半部の第3遺構面で検出した。平面形は不整形で長軸1.4m、短軸1.2m、深さ4cmを測る。検出面直上で攪乱されており、底面付近の一部を検出した。礫が多く出土しており、S X 3とした石列と同遺構であった可能性がある。出土遺物は、陶器の碗(38)・急須(39)、土器の皿(40・41)、碁石(42)、古銭(43～45)、小柄(46)、骨角製の簪(47)がある。43は「元口通寶」、44は「熙寧元寶」、45は「皇宋通寶」である。切り合いではS X 3と重複するが、新旧関係は不明で同遺構の可能性ある。時期は江戸時代前半と考える。

S X 3 (第 12・16 図)

調査区北半部の第 3 遺構面で検出した。調査区を東西に横断するように走り、L 字状に北に短く折れて終わる礫溝である。溝の幅は 60cm ほどで、大小の礫が敷き詰められたように検出された。S X 4 との間に硬く締まった土の範囲が検出されている。形状から建物に関わる遺構と考える。出土遺物は、土器の焙烙 (48)、丸瓦 (49)、砥石 (50) の他、図示していないが貝の破片が出土している。切り合いでは、S X 2・S K 14 と重複し、S K 14 に先行する。S X 2 との新旧関係は不明である。時期は、出土遺物や切り合いなどから江戸時代前半と考える。

S X 4 (第 12・16 図)

調査区北半部の第 3 遺構面で検出した。S X 3 と併走する礫溝で、S X 3 と比べて礫の量がまばらであるため形状や規模は不明瞭である。出土遺物は陶器の碗 (51) が 1 点ある。切り合いでは東西の両端で方形礎石に擾乱される。時期は、江戸時代前半と考える。

S X 15 (第 9 図)

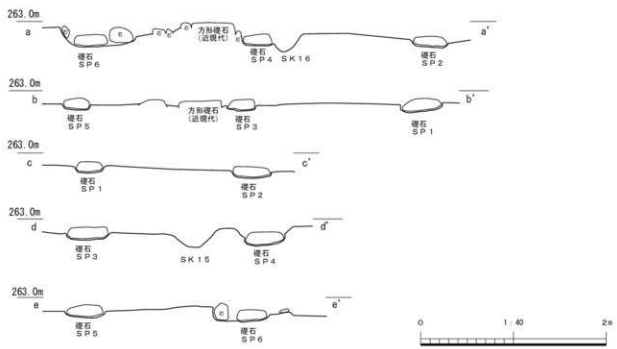
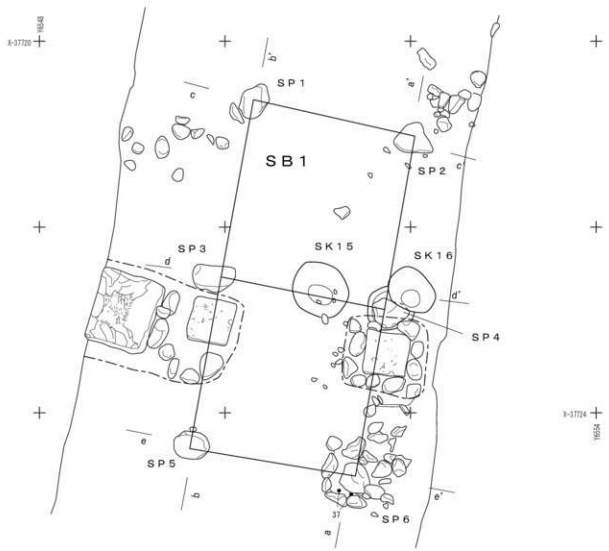
調査区南半部の第 3 遺構面で検出した。平面形は不整形で、長軸 1.68m、短軸 68cm、深さ 12cm を測る。埋土は、灰黄褐色砂質シルトで風化した砂岩を含む。切り合いでは S K 18 に先行するが出土遺物がなく、時期は不明である。

S X 16 (第 11・16 図)

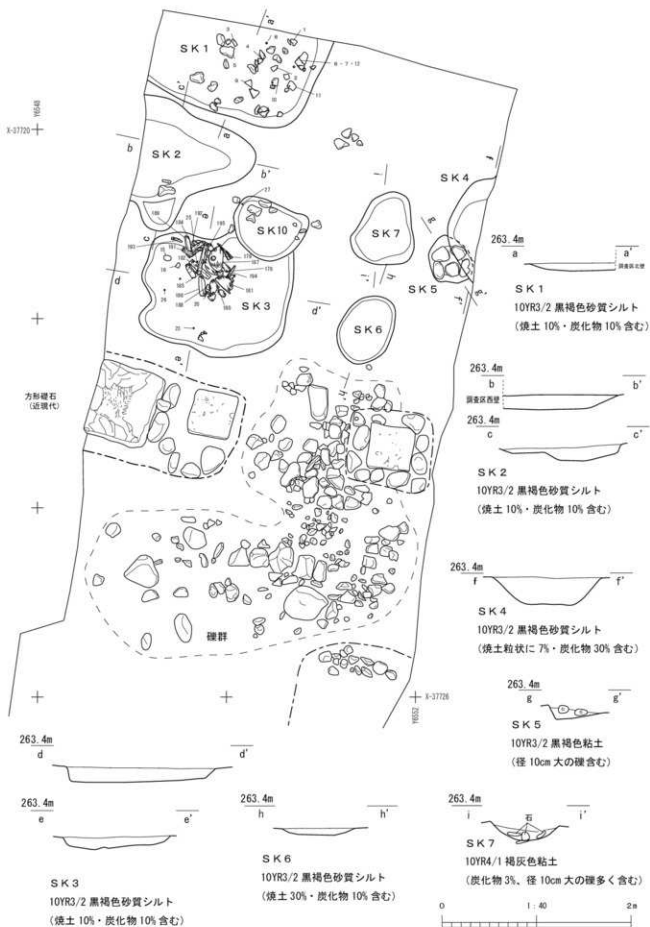
調査区南半部の第 4 遺構面で検出した。調査区外に延びるため平面形の全容は不明である。長軸 1.0m、短軸 90cm、深さ 6cm を測る。埋土は灰色粘土である。出土遺物は、土器の焙烙 (52) と図示していないが陶器の破片がある。他に板状の木材が出土していたが、腐食して取り上げられず出土状況の記録に止めた。切り合いでは、S X 17 より新しい。時期は江戸時代前半と考える。

S X 17 (第 11 図)

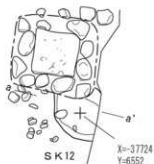
調査区南半部の第 4 遺構面で検出した。他遺構に両端を切られるため、平面形の全容は不明である。長軸 1.9m、短軸 92cm、深さ 6cm を測る。埋土は灰黄色細砂に灰層と炭化物、腐食した植物遺体が混じる。底面の一部に被熱して硬化した範囲を検出している。出土遺物はなく、切り合いでは S X 16 に先行する。時期は、切り合いから江戸時代前半と考える。



第6図 礎石建物 (SB1)



第7図 土坑 (1)



SK12

10YR4/1 褐灰色砂質シルトに
焼土粒 5%、径 2~3mm の白色粗砂粒 10%、
炭化物 3% 含む



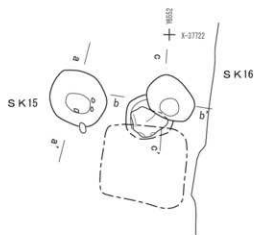
SK13

径 2~3mm の白色粗砂粒に
焼土粒 5%、炭化物 5% 含む。
※層厚は非常に薄いのが、
一定の範囲に敷きつめられたように堆積。



SK14

5YR6/6 橙色砂質シルトに
炭化物 5% 含む
(薄い焼土層)



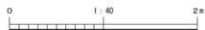
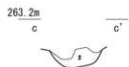
SK15

7. 5YR6/6 橙色砂質シルト
(固く締まる、砂岩多く含む)



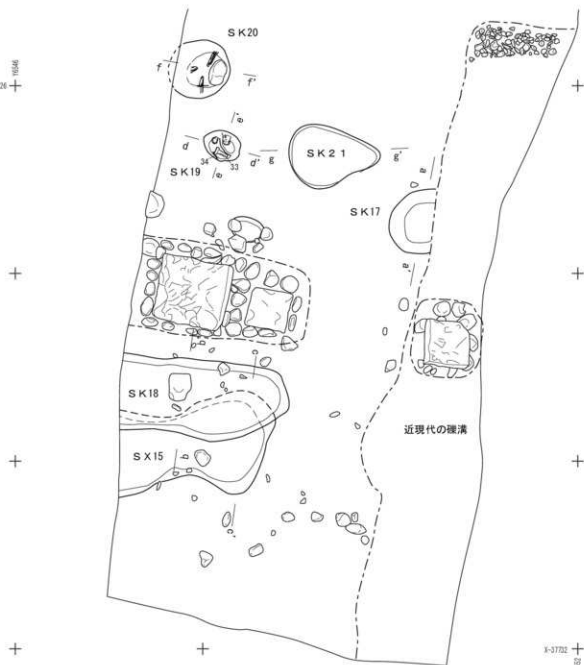
SK16

- 10YR4/1 褐灰色砂質シルトに焼土 40%、
白色粗砂粒多く含む。
- 被熱して岩状に非常に硬く固まった層 (炉床か)
径 2cm 程の小石、縦横状の植物遺体を多く含む。サンプル採取。



第8図 土坑(2)

10546
K-37726



263.2m



SK17

2. 5Y6/1 黄灰色細砂 (灰層) に 5YR5/6 明赤褐色細砂 30%混
- 5YR5/4 にぶい赤褐色細砂に灰層 10%混

263.2m



SK18

- SX15
10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
(風化した砂岩含む)

263.2m



SK18

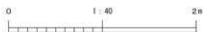
- 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
(風化した砂岩多く含む。焼土・炭化物少量 10%含む)

263.0m

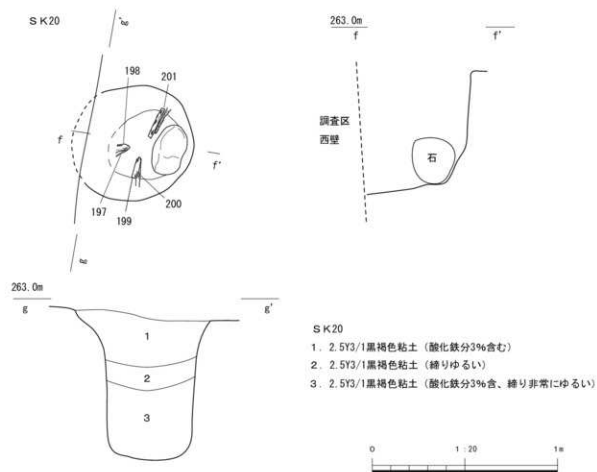
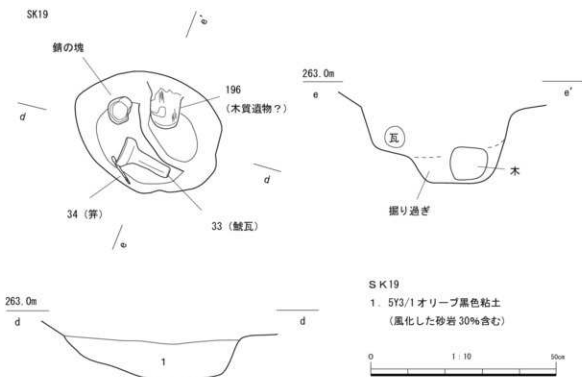


SK21

- 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
(風化した砂岩多く含む。酸化鉄分 7%含む。)

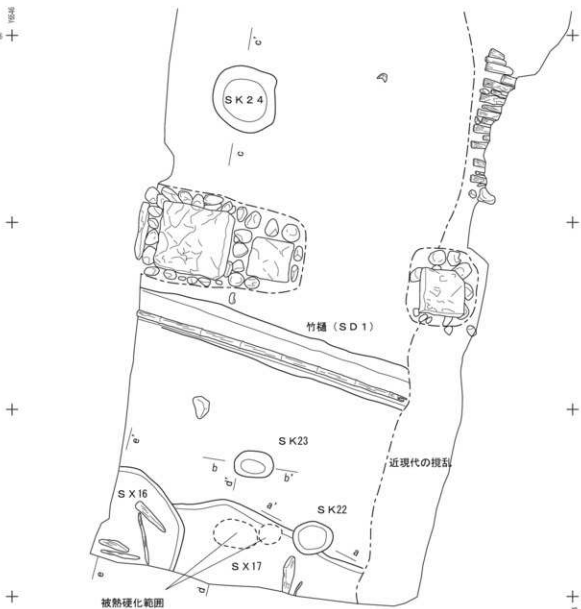


第9図 土坑(3)・不明遺構

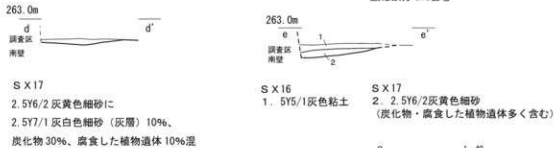
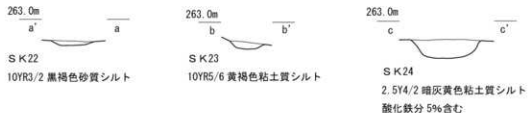


第10図 土坑(4)

1-37726



1-37732



第 11 図 土坑 (5)・不明遺構

S K 25



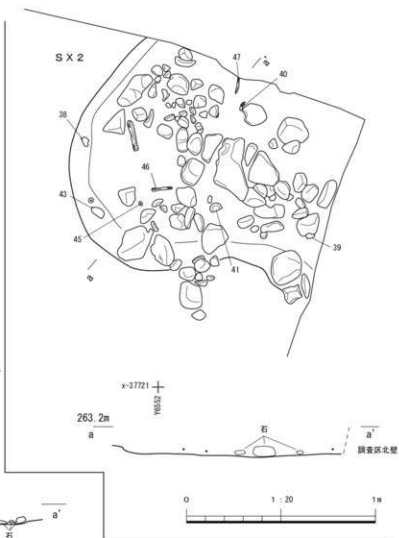
263.0m

a a'



S K 25

5Y3/1 オリーブ黒色粘土質シルト
径 10cm 程の礫多く含む。
(しまり非常にゆるい)

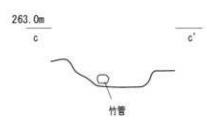
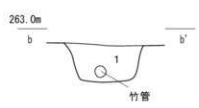
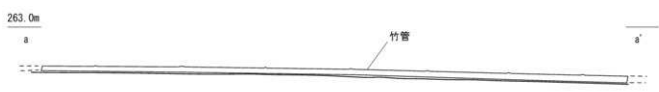
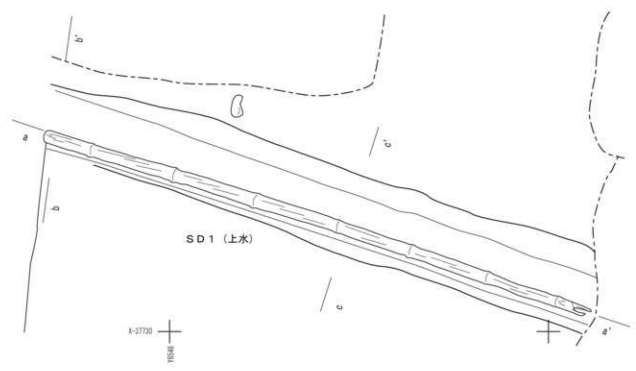


第3透視面 SX 3・4

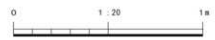
263.2m



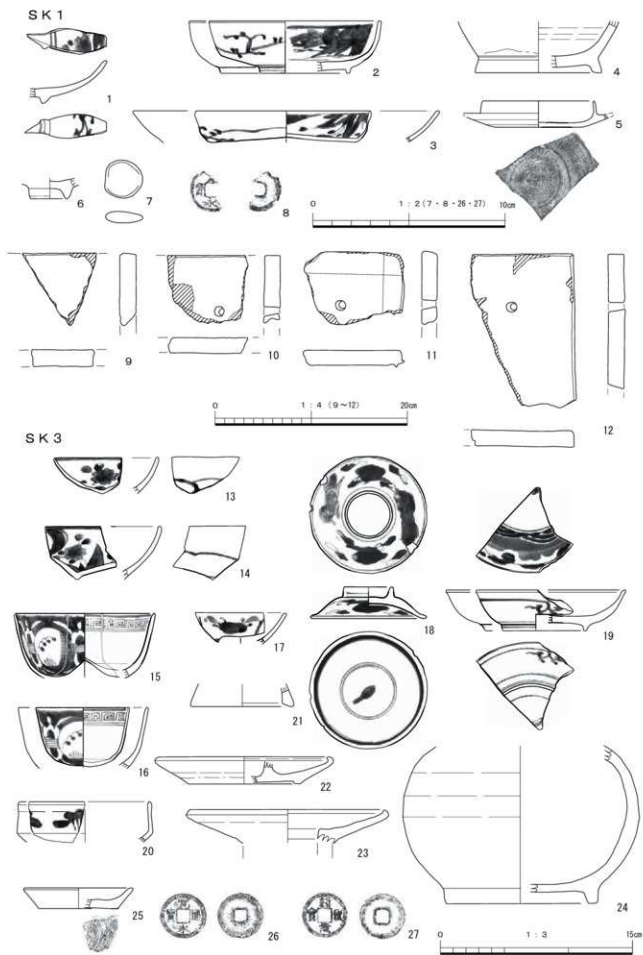
第 12 図 土坑 (6)・礫溝



SD 1
1. 5Y3/1オリーブ黒粘土 (締め非常にゆるい)

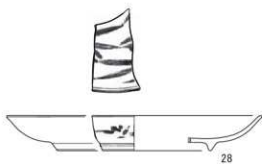


第 13 図 上水

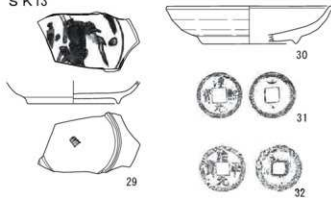


第 14 図 遺構出土遺物 (1) SK 1・3

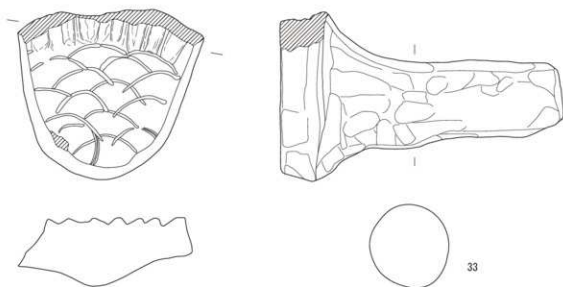
SK 6



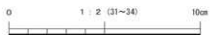
SK 13



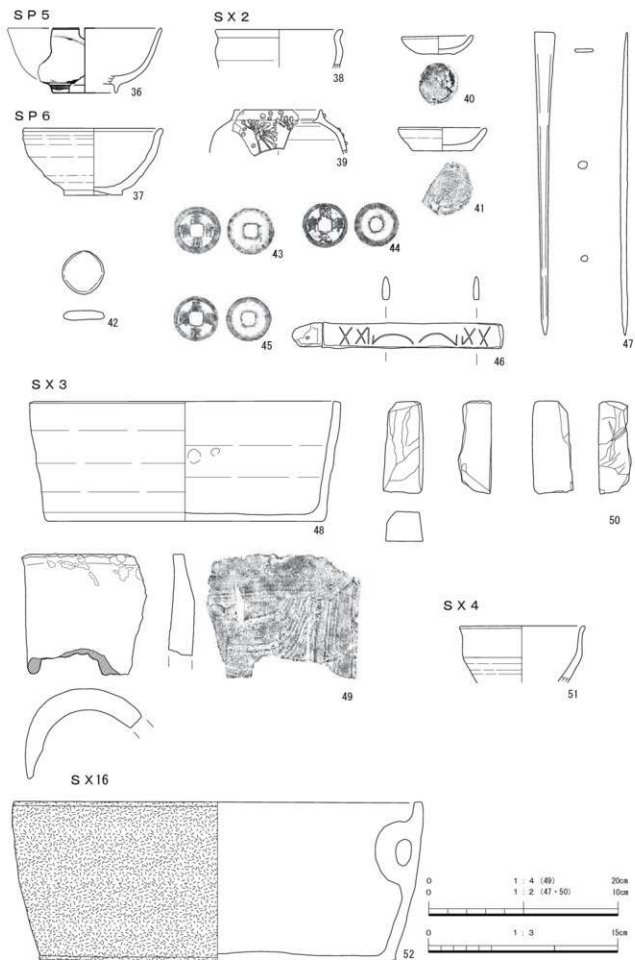
SK 19



SK 20

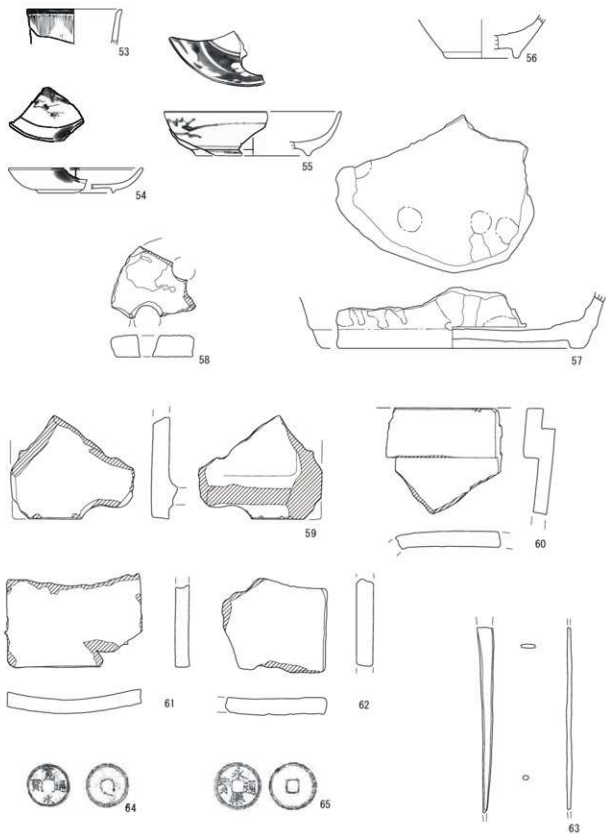


第 15 図 遺構出土遺物 (2) SK 6・13・19・20



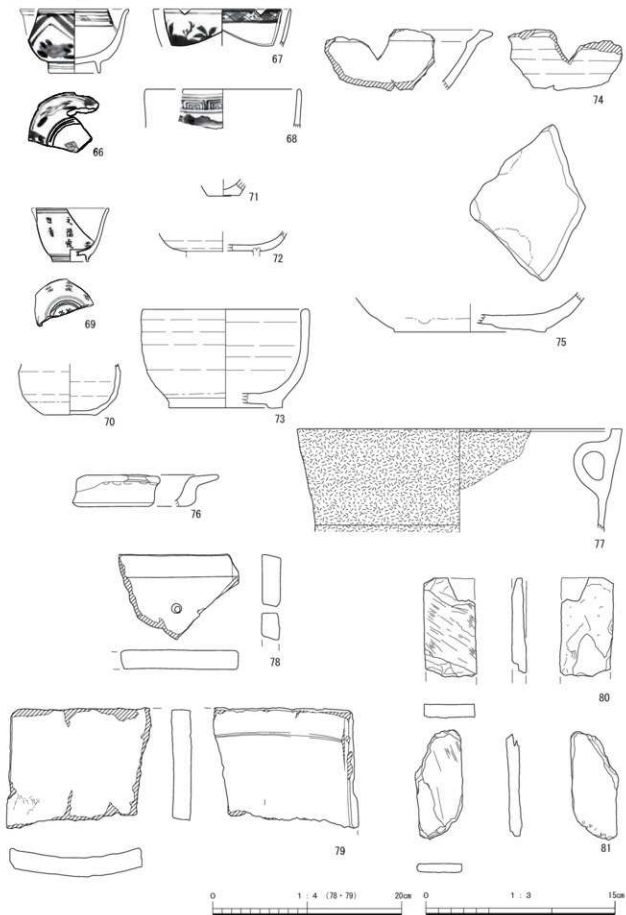
第16図 遺構出土遺物(3) SP・SX

第1・2遺構面



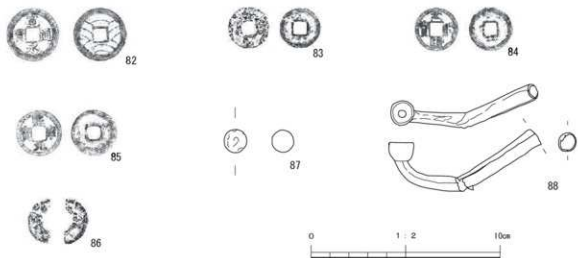
第17図 遺構外出土遺物(1) 第1・2遺構面

第1・2遺構面

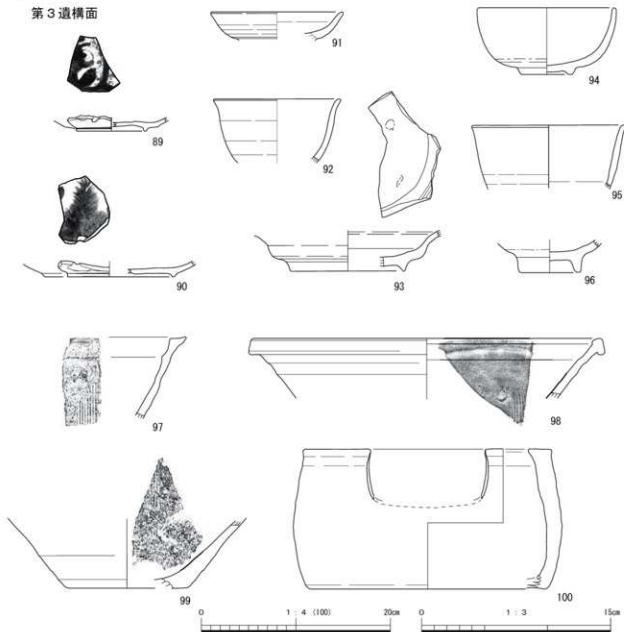


第18図 遺構外出土遺物(2) 第1・2遺構面

第1・2遺構面

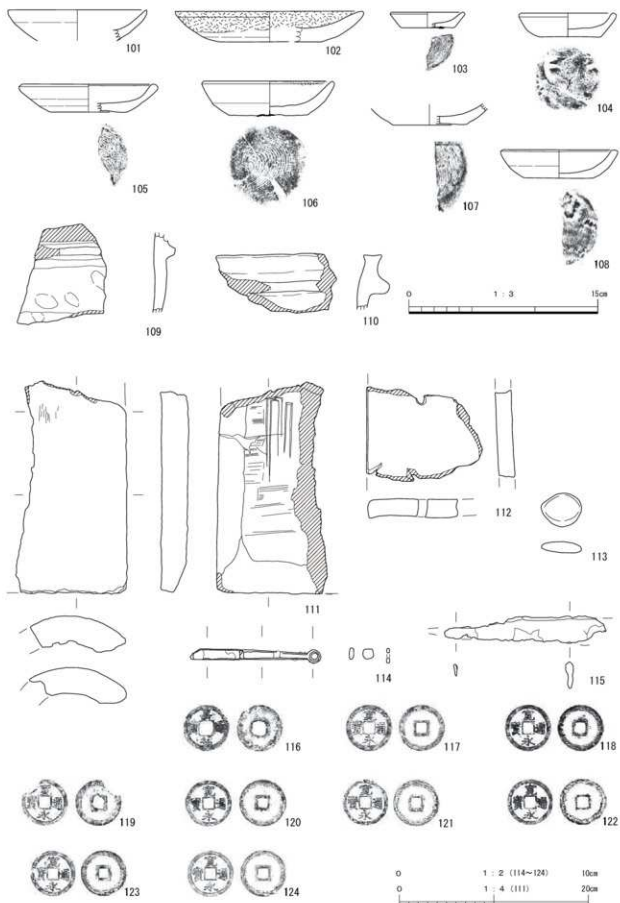


第3遺構面



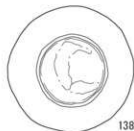
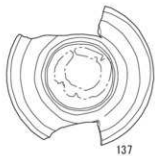
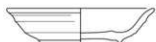
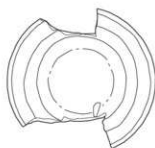
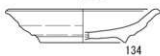
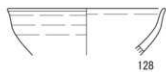
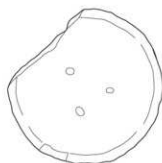
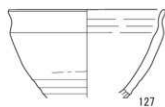
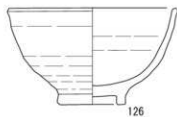
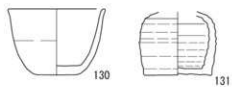
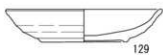
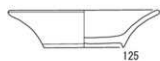
第19図 遺構外出土遺物(3) 第1~3遺構面

第3遺構面



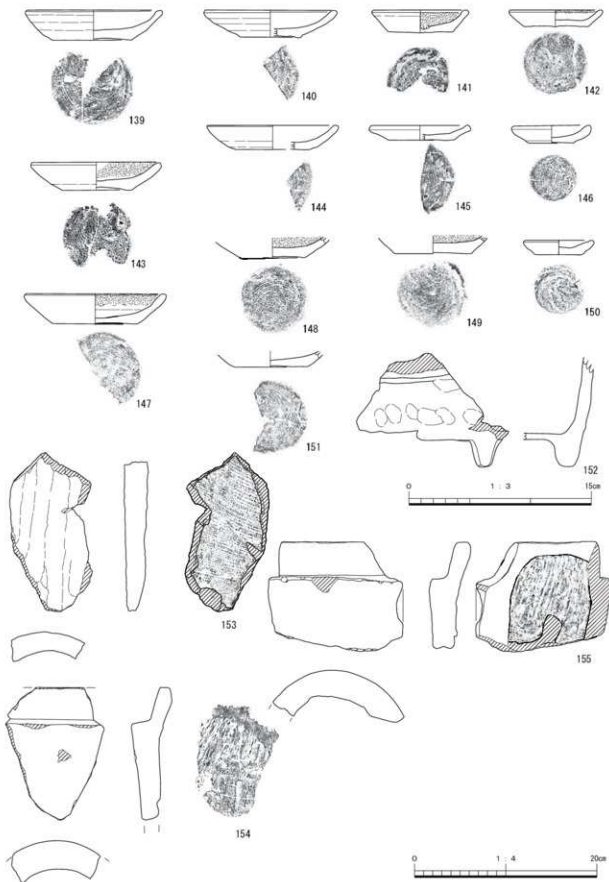
第20図 遺構外出土遺物(4) 第3遺構面

第4遺構面



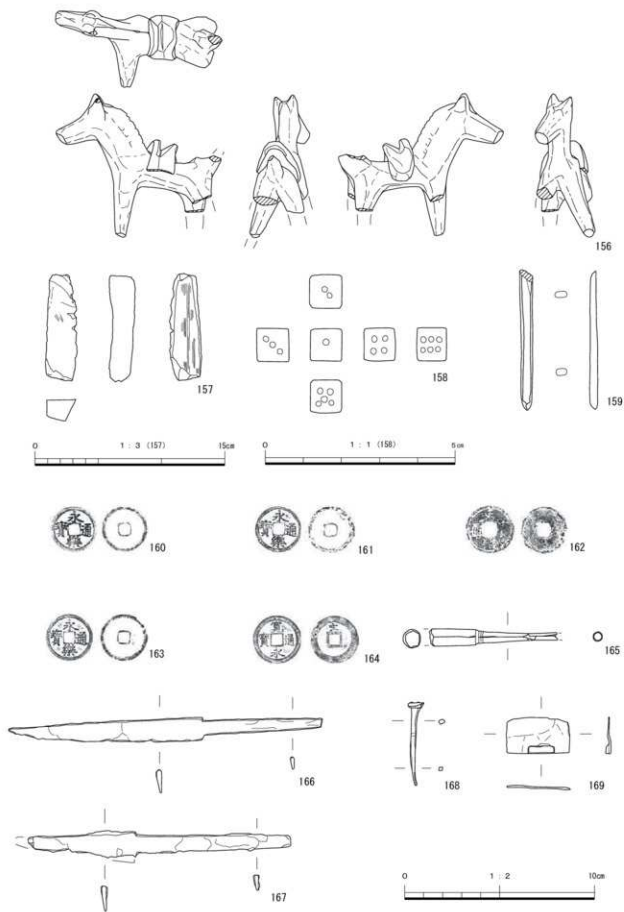
第21図 遺構外出土遺物(5) 第4遺構面

第4遺構面



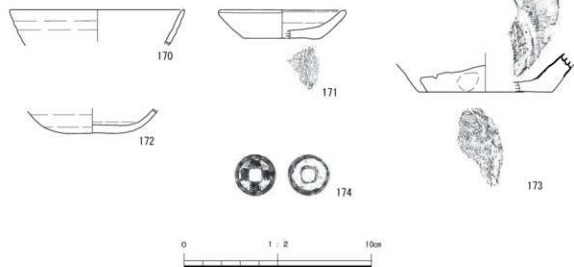
第22圖 遺構外出土遺物(6) 第4遺構面

第4遺構面

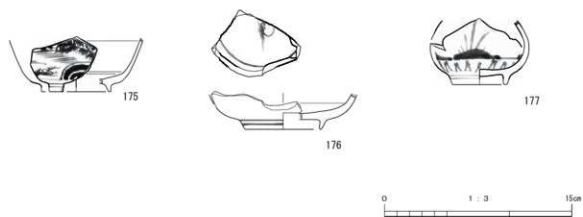


第23図 遺構外出土遺物(7) 第4遺構面

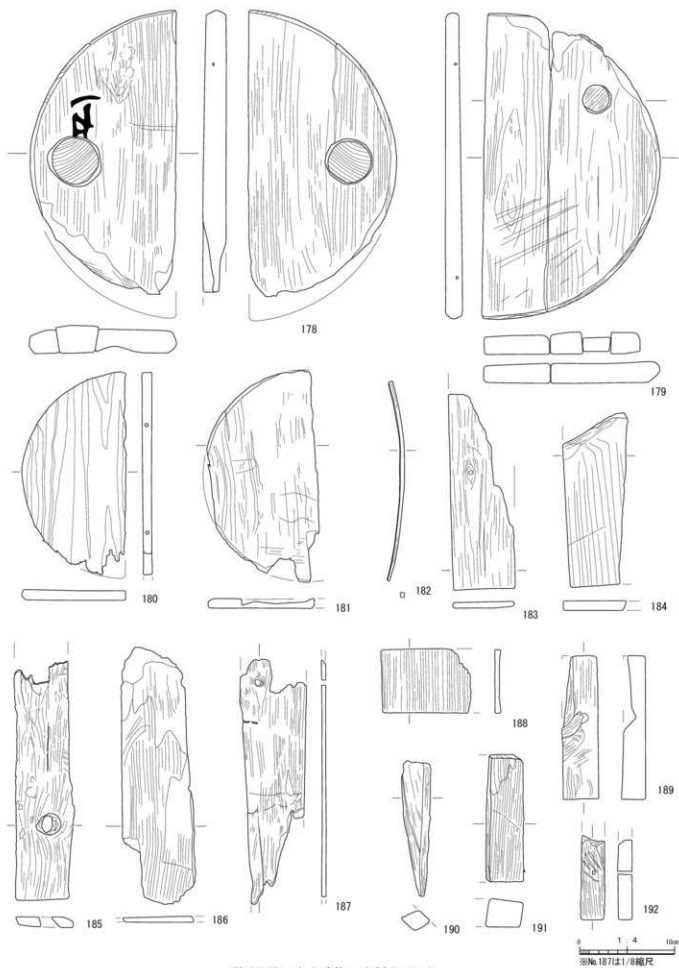
第5遺構面



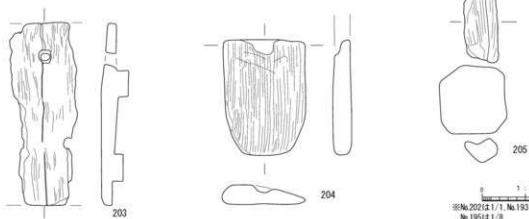
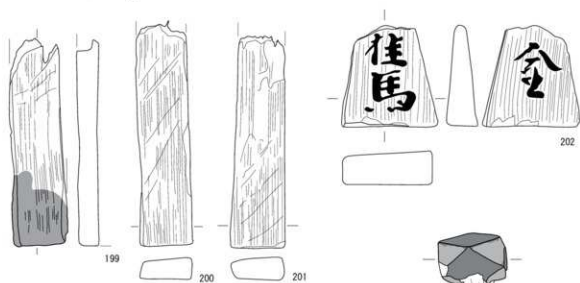
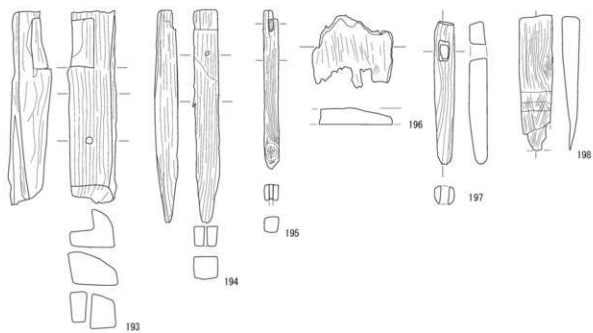
調査区



第24図 遺構外出土遺物(8) 第5遺構面



第 25 図 出土遺物 木製品 (1)



0 1 4 10mm
 ※No.202は1/1, No.193-204-205は1/2,
 No.195は1/8

第26図 出土遺物 木製品(2)

第5表 遺物調査表(4)

遺物 番号	種類 品名	出土地品 位置	形状 材質	単位	重量 (g)		寸法 (cm)		測定 方法	調査 時期	調査 場所	調査 内容	調査 結果	備考
					口徑	高さ	口徑	高さ						
1169-27-17	銅製品 銅製小刀	第1遺跡跡地	銅製	口縁1.9	高さ2.3	長さ0.3	幅0.3	4.3						
1171-24-18	銅製品 銅製小刀	第1遺跡跡地	銅製	口縁1.8	高さ2.2	長さ0.3	幅0.3	2.2						
172-24-18	銅製品 銅製小刀	第1遺跡跡地	銅製	口縁1.4	高さ2.2	長さ0.3	幅0.3	<3.1>						
174-24-18	銅製品 銅製小刀	第1遺跡跡地	銅製	口縁1.4	高さ2.2	長さ0.3	幅0.3	<3.1>						
175-24-18	銅製品 銅製小刀	第1遺跡跡地	銅製	口縁1.4	高さ2.2	長さ0.3	幅0.3	<3.1>						
176-24-18	銅製品 銅製小刀	第1遺跡跡地	銅製	口縁1.4	高さ2.2	長さ0.3	幅0.3	<3.1>						
177-24-18	銅製品 銅製小刀	第1遺跡跡地	銅製	口縁1.4	高さ2.2	長さ0.3	幅0.3	<3.1>						
178-25-19	銅製品 銅製小刀	第1遺跡跡地	銅製	口縁1.4	高さ2.2	長さ0.3	幅0.3	<3.1>						
180-25-19	銅製品 銅製小刀	第1遺跡跡地	銅製	口縁1.4	高さ2.2	長さ0.3	幅0.3	<3.1>						
181-25-19	銅製品 銅製小刀	第1遺跡跡地	銅製	口縁1.4	高さ2.2	長さ0.3	幅0.3	<3.1>						
182-25-19	銅製品 銅製小刀	第1遺跡跡地	銅製	口縁1.4	高さ2.2	長さ0.3	幅0.3	<3.1>						
184-25-19	銅製品 銅製小刀	第1遺跡跡地	銅製	口縁1.4	高さ2.2	長さ0.3	幅0.3	<3.1>						
185-25-19	銅製品 銅製小刀	第1遺跡跡地	銅製	口縁1.4	高さ2.2	長さ0.3	幅0.3	<3.1>						
186-25-19	銅製品 銅製小刀	第1遺跡跡地	銅製	口縁1.4	高さ2.2	長さ0.3	幅0.3	<3.1>						
187-25-19	銅製品 銅製小刀	第1遺跡跡地	銅製	口縁1.4	高さ2.2	長さ0.3	幅0.3	<3.1>						
188-25-19	銅製品 銅製小刀	第1遺跡跡地	銅製	口縁1.4	高さ2.2	長さ0.3	幅0.3	<3.1>						
189-25-19	銅製品 銅製小刀	第1遺跡跡地	銅製	口縁1.4	高さ2.2	長さ0.3	幅0.3	<3.1>						
190-25-19	銅製品 銅製小刀	第1遺跡跡地	銅製	口縁1.4	高さ2.2	長さ0.3	幅0.3	<3.1>						
191-25-19	銅製品 銅製小刀	第1遺跡跡地	銅製	口縁1.4	高さ2.2	長さ0.3	幅0.3	<3.1>						
192-25-19	銅製品 銅製小刀	第1遺跡跡地	銅製	口縁1.4	高さ2.2	長さ0.3	幅0.3	<3.1>						
193-26-20	銅製品 銅製小刀	第1遺跡跡地	銅製	口縁1.4	高さ2.2	長さ0.3	幅0.3	<3.1>						
194-26-20	銅製品 銅製小刀	第1遺跡跡地	銅製	口縁1.4	高さ2.2	長さ0.3	幅0.3	<3.1>						
195-26-20	銅製品 銅製小刀	第1遺跡跡地	銅製	口縁1.4	高さ2.2	長さ0.3	幅0.3	<3.1>						
196-26-20	銅製品 銅製小刀	第1遺跡跡地	銅製	口縁1.4	高さ2.2	長さ0.3	幅0.3	<3.1>						
197-26-20	銅製品 銅製小刀	第1遺跡跡地	銅製	口縁1.4	高さ2.2	長さ0.3	幅0.3	<3.1>						
198-26-20	銅製品 銅製小刀	第1遺跡跡地	銅製	口縁1.4	高さ2.2	長さ0.3	幅0.3	<3.1>						
199-26-20	銅製品 銅製小刀	第1遺跡跡地	銅製	口縁1.4	高さ2.2	長さ0.3	幅0.3	<3.1>						
200-26-20	銅製品 銅製小刀	第1遺跡跡地	銅製	口縁1.4	高さ2.2	長さ0.3	幅0.3	<3.1>						
201-26-20	銅製品 銅製小刀	第1遺跡跡地	銅製	口縁1.4	高さ2.2	長さ0.3	幅0.3	<3.1>						
202-26-20	銅製品 銅製小刀	第1遺跡跡地	銅製	口縁1.4	高さ2.2	長さ0.3	幅0.3	<3.1>						
203-26-20	銅製品 銅製小刀	第1遺跡跡地	銅製	口縁1.4	高さ2.2	長さ0.3	幅0.3	<3.1>						
204-26-20	銅製品 銅製小刀	第1遺跡跡地	銅製	口縁1.4	高さ2.2	長さ0.3	幅0.3	<3.1>						
205-26-20	銅製品 銅製小刀	第1遺跡跡地	銅製	口縁1.4	高さ2.2	長さ0.3	幅0.3	<3.1>						

第5章 まとめ

第1節 土地利用の変遷

調査地点の土地利用者の変遷を、古文書や絵図、災害による要因から検討してみる。

「(一) 柳町家持表口間数御改帳」(『享和三年上下府中各町数間数改帳』享和三年十一月(1803年)に、

(略)

同町式丁目西側北ノ角(図〇)

一、表口九間裏行町並 長十郎抱家守

弥七

一、表口六間裏行町並 忠次右衛門

一、表口八間裏行町並 名主

次郎左衛門

一、表口六間裏行町並 勝次郎

一、表口七間裏行町並 安太郎

一、表口七間裏行町並 又兵衛

一、表口拾四間裏行町並 忠 威

一、表口七間裏行町並 宗三郎

家数小以八軒 小間六拾四間半

同町式丁目東側北ノ角

一、表口拾五間裏行町並 佐 吉

一、表口八間裏行町並 庄右衛門

一、表口八間裏行町並 勘右衛門

一、表口七間裏行町並 幸右衛門

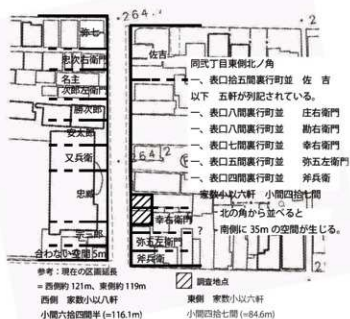
一、表口五間裏行町並 弥五左衛門

一、表口四間裏行町並 弁兵衛

家数小以六軒 小間四拾七間

(略)

『甲州文庫史料』



「(一) 柳町家持表口間数御改帳」

『享和三年上下府中各町数間数改帳』(1803年 甲州文庫)

を元に作成

第27図 「(一) 柳町家持表口間数御改帳」配置図

と言う記述がある。記述に従って「北ノ角」から順番に配置してみると第27図になる。参考として西側に関しては現在の区画延長に対して5m、東側に関しては現在の区画延長に対して約35mの不足がある。この文書が書かれた享和三年十一月のおよそ半年前、享和三年4月3日に「享和の大火＝鳥羽屋火事(鳥羽屋庄右衛門が火元)」があり全て焼けてしまったが、『甲府市史 資料編 近世Ⅲ(町方3)』のこの大火に関する享和三年6月3日の記述には、「…、柳町人馬役の者共拝借金並本陣勘右衛門へ拝借金六十兩、脇本陣幸右衛門へ拝借金三十兩、…」とあり、上述の「(一) 柳町家持表口間数御改帳」の東側に名前を連ねる勘右衛門が本陣、幸右衛門が脇本陣であった事が分かる。また、この文書の少し後に描かれた『甲州道中分間延絵図』(1806年)(第28図)には調査地点周辺の様子が描かれており、図中に「本陣・脇本陣」の名称を確認する事が出来る。

「本陣・脇本陣」に関しては、『甲州道中宿村大概帳六 甲府柳町』(『近世交通史料集6』)に

「本陣 凡建坪四拾坪 門構・玄関附 柳町式丁目 壱軒

脇本陣 凡建坪四拾九坪 門構・玄関共無之 同 壱軒」とある。

宿村大概帳は建坪であるため東側の不足分は本陣、脇本陣の敷地を含む可能性も考えられる。

第 27 図で今回の調査地点を検討してみると、調査地点は現在の二丁目東側の南の角から北に約 20～35m の位置にある。参考までに南の角から「斧兵衛」「弥五左衛門」「幸右衛門」と配置していくと、敷地や空地がある可能性があり断定はできないが、調査地点は「弥五左衛門」もしくは脇本陣の「幸右衛門」の宅地跡の可能性はある。

このうち「弥五左衛門」は、『甲府柳町宿書上并伝馬助郷証文』（『甲州文庫史料』第五巻）に、

「乍恐以書付御届奉申上候 嘉永元年五月廿一日(1848年) 旅籠屋 弥五左衛門、

「差上申宿取帰り書上之事 嘉永元年九月(1848年) 柳町式丁目 旅籠屋 弥五左衛門

と記述されており、名前が確認出来る。

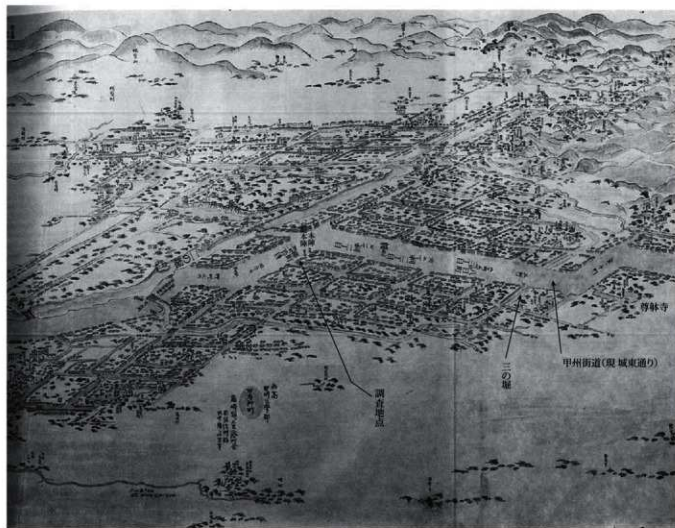
上記「(一)柳町家持表口間数御改帳」に記載された「弥五左衛門」と同一人物だとすると、享和三年から安政元年まで四十数年の時間はあるが、代々受け継がれているという事か。

調査地点付近は前述した享和三年の大火の後も火事・大地震により大きな被害を受けた。

享和三年の大火は柳町二丁目が火元で全て焼けてしまい、19年後の文政五(1822)年の八日町二丁目火元となった大火でも「…柳町式丁目・三丁目、…不残、…」(『坂田家文書』)とある。

嘉永七(安政元)(1854)年には柳町三丁目の酒造業富士井屋栄助宅裏物置が火元の大火が起こった(記事には柳町三・四丁目の被害は記述されているが、式丁目の被害は記述されていない)。

この年には大地震も起こる。



第 28 図『甲州道中分間延絵図』(山梨県立図書館蔵)

*一部切抜き・加筆

『甲州文庫史料第1巻社会風俗編』(嘉永七年三月廿四日(=安政元年(1854年))

「一、嘉永七年 大地震の記」に

一、嘉永七年寅十一月四日朝五ツ時大地震、市中一統大騒動、潰れ家・潰土蔵数多有之、別而八日町
老丁目・魚町式丁目三丁目・柳町式丁目三丁目、大損之建家は勿論、土蔵等ハ無事成は老ツも無之、
前代未聞之大変二候、…」

との記述を見ることができ、安政の大地震によって甲府城下も大きな被害を蒙ったことがわかる。

明治から大正にかけて、柳町は商業地として大いに賑わった。この頃の柳町の様子は写真で確認できる(第29図)。明治期の調査地点は、「有信銀行」のほぼ斜め向かいにあたり、写真では調査地点と推測される店舗の一部が確認できる。



第29図「馬車路線が走る柳町通り」(中央4丁目、明治末期)(北西から)

* 中央3階建の右側あたりが調査地点か。(『目で見る甲府の100年』P44、郷土出版社より)

古絵図(第30図)で調査地点を確認してみると、明治32年(1899年)の絵図では、天正堂文具店を中心に北側に中村金物店、南側に富士屋呉服店の名称を見ることが出来る。大正11(1922年)以前(図中「十一屋」は大正12年に移転している。)の絵図では空地となっている。

第2節 各遺構面の様相

遺構外出土遺物を中心として、各遺構面の様相をまとめる。

第1・2遺構面（第4・17～19図）

調査区内では、大きく分けて上下2層の焼土層が観察されている。上位に位置するのが、昭和20年7月の甲府空襲によるものとみられる焼土層で、その焼土層を掘り下げて確認した第4層を第1遺構面とした。第2遺構面は、第1遺構面の下で再び確認された下位の焼土層を掘り下げて確認した遺構面である。下位の焼土層は、戦災以前の火事によって堆積したものと推測した。

遺構外出土遺物は、磁器・陶器・土器・瓦・骨角製品・石製品・金属製品など36点を図示した。53～56と66～69は磁器である。54の皿は外面にコバルト、見込の絵柄には緑色釉が用いられている。66・69は端反碗である。69の体部には「花之隠逸也者」と北宋の儒学者周敦頤の愛蓮説の一節が見える。57・70・72～75は陶器である。57・75は摺鉢で、見込に重ね焼き痕がある。75の高台は凹型となっている。58・59・76・77は土器で、58は七輪の目皿、59は焔炉の底部とみられる。76・77は焙烙である。77は内耳を持つやや深めの焙烙で外面はほぼ全面炭化している。60～62・78・79は瓦である。63は骨角製の簪で、80・81は砥石である。64・65と82～86は古銭で、82は寛永通寶の波銭である。87は鉄砲玉、88は煙管である。

第1・2遺構面で検出した主な遺構は、SK1～4・6など焼土を埋土とする遺構で、火災時に生じた瓦礫・焼土塊などを投棄した遺構と考える。出土遺物は江戸時代後半の遺物を中心とする。また、遺構外出土遺物も江戸時代後半から近代を中心とした時期とみられ、調査区内に堆積していた下位の焼土層は、江戸時代後半の甲府勤番期に発生した火事によるものである可能性が高い。なお、同じ第1・2遺構面で検出した大小の方形礎石を用いた建物跡は、戦災焼土層を攪乱しており、少なくとも戦後までは存在していたと考える。

第3遺構面（第4・5・19・20図）

硬く締まった第11層の上面を第3遺構面とした。調査区の北半部では、第11層の上位に径2～3mmの石灰質の粗砂を含む層が堆積する。

遺構外出土遺物は、磁器・陶器・土器・瓦・碁石・金属製品の36点を図示した。89・90は磁器の皿である。91～99は陶器である。91・93は皿で、93は見込に重ね焼き痕が残る。94～96は碗、97～99は摺鉢である。100から110は土器で、100は焔炉（風炉）である。101～108は皿で、102は灯明皿である。109・110は、口縁部に羽釜状の突帯がつく焙烙である。111・112は瓦、113は碁石、114・115は不明金属製品である。116～124は古銭で、116の「嘉祐通寶」以外は「寛永通寶」である。

第3遺構面で検出した主な遺構は、SK12～14・16・17・19・20、SX3・4などである。

SK12～14・16・17では、埋土に石灰質の白色粗砂粒が混入していた。また、焼土や炭化物、灰層などが検出されており、被熱の痕跡もみとめられた。特にSK16では、被熱の痕跡が顕著で、底面が岩石状の塊となっており、この塊には小石や植物の繊維、石灰質の塊が多く観察されている。岩石状の塊や石灰質の白色粗砂粒については、鉄鋼スラグのようなものではないかと想像している。石灰石は現在でも、製鉄の過程で、鉄鉱石に含まれる鉄以外の成分を取り除く際に用いられている。石灰石を加えると融点が下がり、鉄とそれ以外の成分の分離・回収が容易になるが、この際に生じた回収物が鉄鋼スラグとなる。このスラグは、徐々にゆっくりと冷却されると岩石状となり、水などで急激に冷却すると粒状となる。岩石状の塊を蛍光X線分析した結果では、鉄分が検出されるものの通常の土壌に含まれ

る程度で、特定の金属は検出されていない。下層となるが第4遺構面では、鉛を含む青銅製の永楽通寶とその鏡面文字が凹状に施された銅を含む鉛製の金属塊が出土している。これらの遺構が何らかの生産活動に関わるものである可能性もあると思われるが、今後の検討課題としたい。

S K 19では、鯉瓦の鱗にあたる部品と骨角製の簪が出土した。甲府城跡で出土した鯉瓦と形状が類似するが、顕微鏡観察では表面に金箔等は確認されなかった。また、甲府城跡で出土した鯉瓦の鱗模様は、そのほとんどがスタンプで刻印されたものだが、S K 19出土の鯉瓦の鱗模様は手描きで刻まれている。当調査地点付近では江戸期においては柳町宿の本陣および脇本陣があったと推定され、商業活動も活発な場所であったが、江戸期の町人地の建物に鯉瓦を使用するか否かについて検討の余地が残った。その他、礫溝としたS X 3・4は、何らかの構造物の基礎とも考えられ、前述した石灰質の白色粗砂粒がS X 4以北で検出されていることから、同時期に機能していた可能性は高い。

第3遺構面で出土した遺物は、江戸時代前半を中心とし、18世紀代に入る遺物も含まれているとみられる。

第4遺構面（第5・21～23・26図）

第13層の硬く締まった層を遺構面としている。

遺構外出土遺物は、磁器・陶器・土器・瓦・土製品・石製品・骨角製品・金属製品・木製品など45点を図示した。125は磁器の皿で、高台に砂が付着する。126～138は陶器である。126～128・130・132は碗で、127・128は天目茶碗である。131は瓶、133は鉢である。内外面に鉄軸で植物文様を施す。129・134～138は皿である。134は見込に鉄軸で文様を施す。136～138は見込または高台内に重ね焼き痕がみられる。139～151は土器の皿である。底面の切り離しは回転系切りである。141～143と147～149は灯明皿として使用した可能性がある。152は火鉢である。153～155は丸瓦で内面に布目がみられる。156は土馬、157は砥石、158は賽、159は簪である。160・161・163は「永楽通寶」である。162は永楽通寶の鏡面文字が凹状に施された金属塊である。161と接合状態で出土したものである。164は「寛永通寶」の文銭である。165は煙管、166・167は刀子で、168は釘、169は金具である。202～205は木製品で、202は将棋駒「桂馬」、203は下駄、204は不明加工木、205は栓状木製品で、頭部が多角形にカットされている。

第4遺構面で検出した主な遺構は、S B 1（礎石建物）とS D 1（竹樋）である。S K 16・S K 19・20も検出できたのは、この面であったが、埋土観察などから第3遺構面に属する遺構と判断している。

第4遺構面で出土した遺物は、江戸時代前半の17世紀初頭を中心としているとみられるが、164の文銭は、17世紀中頃まで時代が下る。S D 1の竹樋は、甲府城主浅野氏が、甲府上水を整備して間もない頃のものであった可能性がある。

第5遺構面（第5・24図）

第15層の硬く締まった黒色粘土を第5遺構面としている。調査区北半部では遺構はなく、南半部でも単独ピット1基を検出したのみである。

遺構外出土遺物で図示できたのは5点である。170は土師器の坏か。171は土器の皿、172は須恵器坏、173は陶器鉢である。174は古銭だが、判読不能である。出土物からは時期は不明である。

引用・参考文献

- 江戸遺跡研究会編 2001『図説 江戸考古学研究辞典』柏書房
- 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』
- 郷土出版社 1990『目で見る 甲府の100年』
- 黒岩俊郎 1991『金属の文化史』技術文化ブックス
- 甲府市役所 1918『甲府略史』
- 甲府市教育委員会 2001『甲府城下町遺跡Ⅰ』（甲府市文化財調査報告15）
- 甲府市教育委員会 2002『甲府城下町遺跡Ⅱ』（甲府市文化財調査報告19）
- 甲府市教育委員会 2006『甲府城下町遺跡Ⅲ』（甲府市文化財調査報告33）
- 甲府市教育委員会 2007『甲府城下町遺跡Ⅳ』（甲府市文化財調査報告39）
- 甲府市教育委員会 2009d『甲府城下町遺跡Ⅴ』（甲府市文化財調査報告52）
- 甲府市教育委員会 2013『甲府城下町遺跡Ⅸ』（甲府市文化財調査報告64）
- 甲府市教育委員会 2013『甲府城下町遺跡Ⅹ』（甲府市文化財調査報告66）
- 甲府市教育委員会 2014『甲府城下町遺跡Ⅺ』（甲府市文化財調査報告69）
- 甲府市教育委員会 2001b『秋山氏館跡』（甲府市文化財調査報告16）
- 甲府市教育委員会 2004『塩部遺跡Ⅰ』（甲府市文化財調査報告24）
- 甲府市教育委員会 2005『塩部遺跡Ⅱ』（甲府市文化財調査報告30）
- 甲府市教育委員会 2004『甲府市内遺跡Ⅰ－昭和61年度～平成5年度試掘調査報告書－』（甲府市文化財調査報告26）
- 甲府市教育委員会 2005『甲府市内遺跡Ⅱ－平成6年度試掘調査報告書－』（甲府市文化財調査報告29）
- 甲府市教育委員会 2006『甲府市内遺跡Ⅲ－平成7・8年度試掘調査報告書－』（甲府市文化財調査報告31）
- 甲府市教育委員会 2007『甲府市内遺跡Ⅳ－平成9～10年度試掘調査報告書－』（甲府市文化財調査報告35）
- 甲府市教育委員会 2008『甲府市内遺跡Ⅴ－平成11～12年度試掘調査報告書－』（甲府市文化財調査報告38）
- 甲府市教育委員会 2009『甲府市内遺跡Ⅵ－平成13～14年度試掘調査報告書－』（甲府市文化財調査報告41）
- 甲府市教育委員会 2010『甲府市内遺跡Ⅶ－平成15～16年度市内遺跡試掘調査報告書－』（甲府市文化財調査報告49）
- 甲府市教育委員会 2011『甲府市内遺跡Ⅷ－平成17～18年度試掘調査報告書－』（甲府市文化財調査報告59）
- 甲府市教育委員会 2013『甲府市内遺跡Ⅸ－平成19～20年度試掘確認調査報告書－』（甲府市文化財調査報告63）
- 甲府市教育委員会 2014『甲府市内遺跡Ⅹ－平成21・22年度試掘確認調査報告書－』（甲府市文化財調査報告68）
- 甲府市市史編纂委員会 1987『甲府市史 史料編 第3巻 近世Ⅱ（町方2）』
- 甲府市市史編纂委員会 1987『甲府市史 史料編 第4巻 近世Ⅲ（町方3）』
- 児玉幸多 1972「甲府道中宿村大概帳 六」『近世交通史料集六 日光・奥州・甲州 道中宿村大概帳』吉川弘文館
- 新宿区内藤町遺跡調査会 1992『内藤町遺跡』
- 新宿区内藤町遺跡調査会 1993『江戸のやきものくらし』
- 外山秀一 2004「甲府盆地の地形環境の変化と人間の活動」『山梨県史研究 第12号』
- 山梨県教育委員会 1995『甲府城下町遺跡』
- 山梨県教育委員会 2004a『甲府城下町遺跡－甲府駅周辺土地区画整理事業地内43街区埋蔵文化財発掘調査報告書－』
- 山梨県教育委員会 2004『甲府城下町遺跡（日向町遺跡第2地点）』（山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第220集）
- 山梨県教育委員会 2005『県指定史跡甲府城（上巻）（下巻）』（山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第222集）
- 山梨県教育委員会 2008『甲府城下町遺跡（北口照有地）』（山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第258集）
- 山梨県教育委員会 2013『甲府城下町遺跡（古府中環状浅原橋線）』（山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第288集）

第6章 自然科学分析

銭および付着金属塊の材質分析

帝京大学文化財研究所

藤澤 明

1. はじめに

本遺跡で出土した銭（第4遺構面出土：遺物番号161）に、金属塊（同162）の付着が観察された。その金属塊は、銭より厚みがあるが、銭と同様に角状の穿を有している。これは意図して銭に接合されたと考えられる。そこで、銭および付着している金属塊の材質を調査した。

2. 対象とした資料

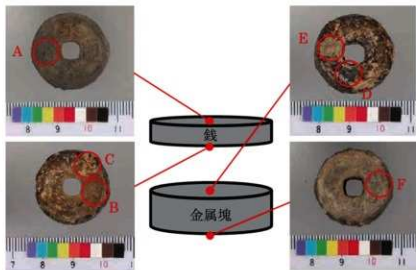
対象とした資料の外観を示す。銭種は永楽通寶で、表面は暗緑色であり、金属塊の表面は白色を帯びた茶色である。その側面を観察すると、銭と金属塊の間には隙間が観察される部分がある。銭の外周部の厚みは約1.5mm、直径は約25mmであり、金属塊の側面の厚みは約5mm、直径は約25mmである。



3. 分析方法と分析位置

可搬型蛍光X線分析装置（Innov-X Systems DELTA PREMIUM DP-4000、以下XRF）を使用し、非破壊で元素分析を行った。分析モードは2 Beam Mining Plusを使用し、タンタル管球の電圧を自動で40kVと15kVに切り替えて測定することにより塩素、硫黄、カルシウムなどの軽元素の分析も可能である。分析時間は150 [sec]とした。X線の照射範囲は約φ10mmである。

保存修復処置の過程において、銭と金属塊を分離した。そこで、それぞれの表裏において分析を行った。分析した位置を赤丸で示し、それぞれにAからFと名前を付与した。分析位置は、表面の色が異なる部分、できる限り平坦な部分を選定した。



4. 分析結果と考察

得られたXRFスペクトルを付録に示し、検出された元素を表に示す。

分析位置A、B、Cは銭の分析結果であり、検出された元素の種類に差異はない。銭の合金成分と考えられる元素は、銅(Cu)、錫(Sn)、鉛(Pb)であり、鉛を含む青銅製である。その他の元素である鉄(Fe)、カルシウム(Ca)、マンガン(Mn)、硫黄(S)は付着物に由来する成分であると考えられる。また、分析位置CにおけるXRFスペクトルより、分析位置AおよびBよりも鉛(Pb)に由来するピーク強度が高い。この部分は、特に白色味が強い茶色を呈しており、厚い付着物が固着している。後述するように金属塊の主元素は鉛(Pb)であり、この酸化物が付着していると考えられる。

分析位置D、E、Fは金属塊の分析結果であり、検出された元素の種類に差異はない。主成分は鉛(Pb)であり、銅(Cu)を含む。その他の元素は、同様に付着物に由来する成分であると考えられる。金属塊の表裏で含有元素に差異がないことから、接合に金属鍍は使用されていないと考えられる。

金属塊の銭と接していた面には、凹状の文字の痕跡が観察される。その文字は「永楽通寶」であり、銭と同じであるが鏡面文字となっている。表面クリーニング後の写真を示す。銭の接していた面には文字がないため、銭と一体化する以前に、文字を転写したと考えられる。鉛は、低融点で高比重であるだけでなく、柔らかく加工しやすい金属である。容易に青銅銭の文字を転写することが可能であるが、その意図は不明である。

分析位置	検出された元素
銭	A Cu, Sn, Pb, Fe, Ca, Mn, S
	B Cu, Sn, Pb, Fe, Ca, Mn, S
	C Cu, Sn, Pb, Fe, Ca, Mn, S
金属塊	D Cu, Pb, Fe, Ca, Mn, S
	E Cu, Pb, Fe, Ca, Mn, S
	F Cu, Pb, Fe, Ca, Mn, S

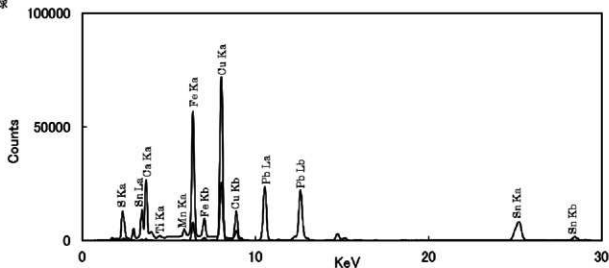


銭の凸状文字
(クリーニング後)

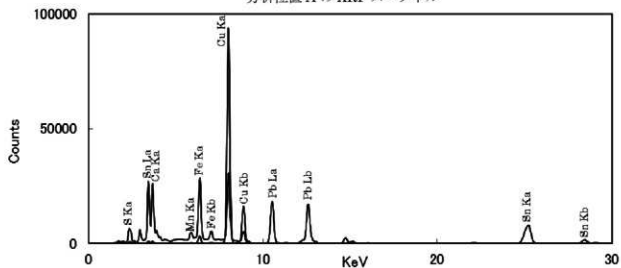
金属塊の凹状文字
(クリーニング後)

5. まとめ

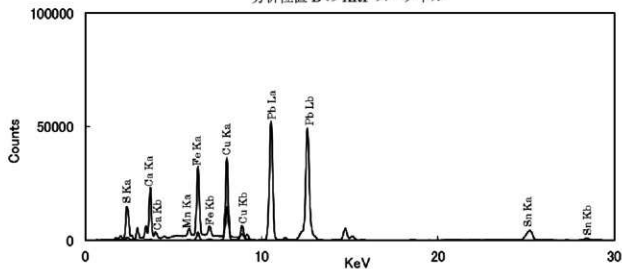
銭および付着している金属塊の材質を調査した結果、銭は鉛を含む青銅製であり、金属塊は銅を含む鉛製である。金属塊には凹状の文字が観察され、銭と一体化する以前に文字を転写したと考えられる。



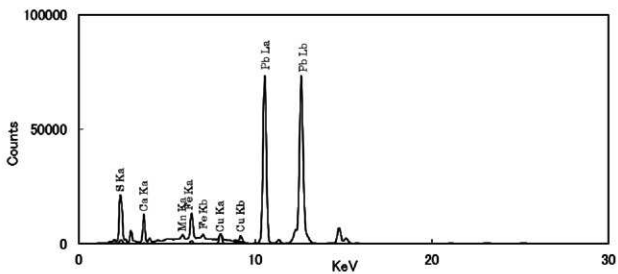
分析位置 A の XRF スペクトル



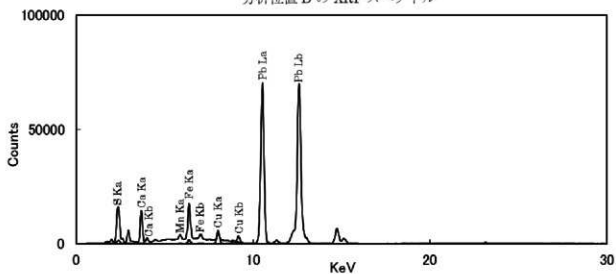
分析位置 B の XRF スペクトル



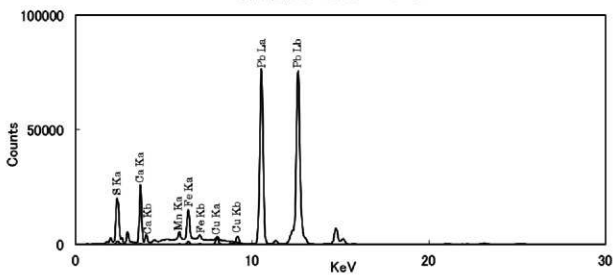
分析位置 C の XRF スペクトル



分析位置 D の XRF スペクトル



分析位置 E の XRF スペクトル



分析位置 F の XRF スペクトル



第1・2遺構面南半部完掘（北から）



第3遺構面南半部完掘（北から）



第1・2遺構面北半部完掘（北から）



第3遺構面北半部完掘（北から）



第4遺構面南半部完掘（北から）



第5遺構面南半部完掘（北から）



第4遺構面北半部完掘（北から）



第5遺構面北半部完掘（北から）

図版 2



第5遺構面南半部完掘（北から）



第5遺構面北半部完掘（南から）



方形礎石建物北半部検出（南から）



方形礎石下部杭検出（南から）



SB1 検出（北から）



SB1 SP4・6 検出（北から）



SB1 SP1・3 検出（南から）



SB1 SP6 遺物出土状況（北から）



SK1 遺物出土状況 (東から)



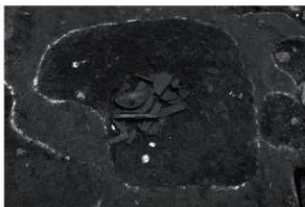
SK1 完掘 (東から)



SK2 セクション面 (南から)



SK2 完掘 (東から)



SK3 遺物出土状況 (西から)



SK3 完掘 (東から)



SK4 完掘 (西から)



SK5 完掘 (西から)

図版 4



SK6 セクション面（東から）



SK6 完掘（西から）



SK7 礫検出（西から）



SK7 完掘（北から）



SK12 完掘（西から）



SK13 セクション面（東から）



SK13 完掘（南から）



SK13 検出建築部材（東から）



SK14 検出 (西から)



SK14 完掘 (南から)



SK15 セクション面 (西から)



SK15 完掘 (北から)



SK16 完掘 (北から)



SK16 掘り方 (西から)



SK17 セクション面 (西から)



SK17 完掘 (西から)



SK19 遺物出土状況（北から）



SK19 遺物出土状況（北から）



SK20 遺物出土状況（東から）



SK20 完掘（東から）



SK21 完掘（北から）



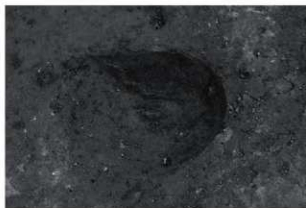
SK22 セクション面（東から）



SK22 完掘（北から）



SK23 セクション面（南から）



SK23 完掘 (北から)



SK24 セクション面 (東から)



SK24 完掘 (東から)



SK25 セクション面 (西から)



SK25 完掘 (南から)



竹樋検出 (東から)



SX2 検出 (南から)



SX3 検出 (北から)

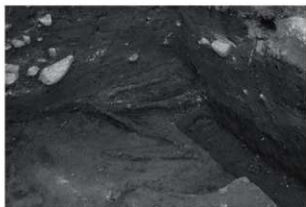
図版 8



SX15 完掘（南から）



SX16 遺物出土状況（北から）



SX16 完掘（北から）



SX17 検出（東から）



SX17 セクション面（東から）



SX17 完掘・被熱硬化面検出（東から）



第3遺構面遺物出土状況（北から）



第3遺構面遺物出土状況（北から）



第4遺構面遺物出土状況（北から）



第4遺構面遺物出土状況（南から）



第4遺構面遺物出土状況（南から）



第4遺構面遺物出土状況（南から）



第4遺構面遺物出土状況（東から）



第4遺構面遺物出土状況（北から）



第4遺構面遺物出土状況（西から）



第4遺構面遺物出土状況（東から）

図版 10



第4遺構面遺物出土状況（北から）



第4遺構面遺物出土状況（北から）



第5遺構面遺物出土状況（南から）



調査前現況（南から）



調査区全景北半部（南から）

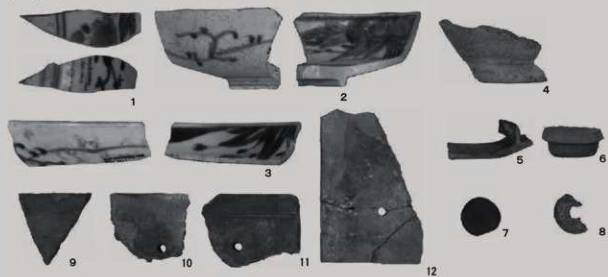


調査区全景南半部（北から）

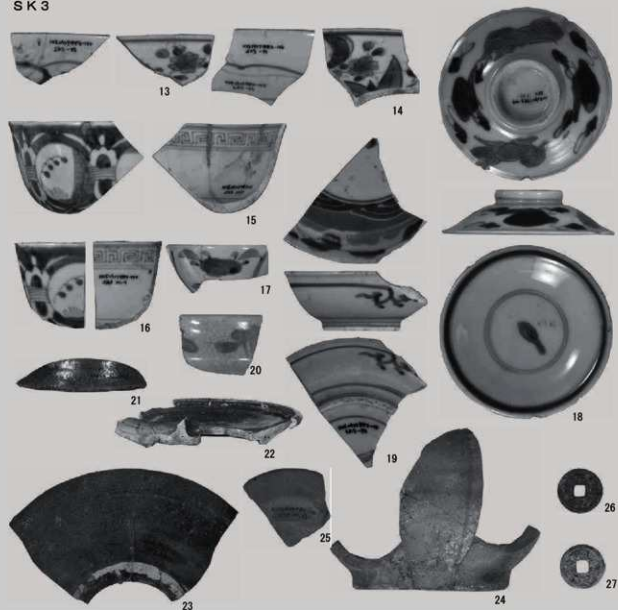


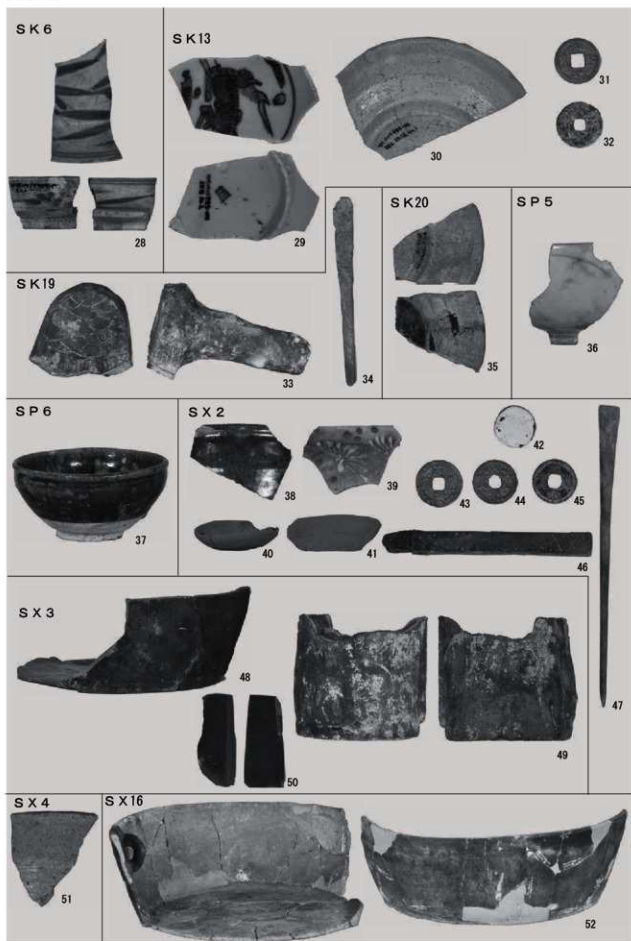
調査後状況（南から）

SK 1

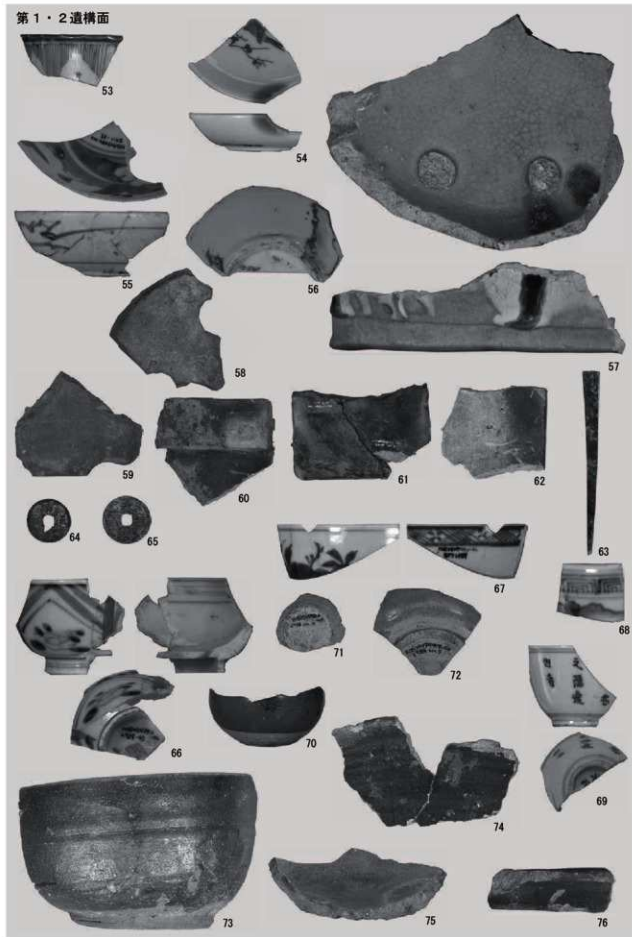


SK 3

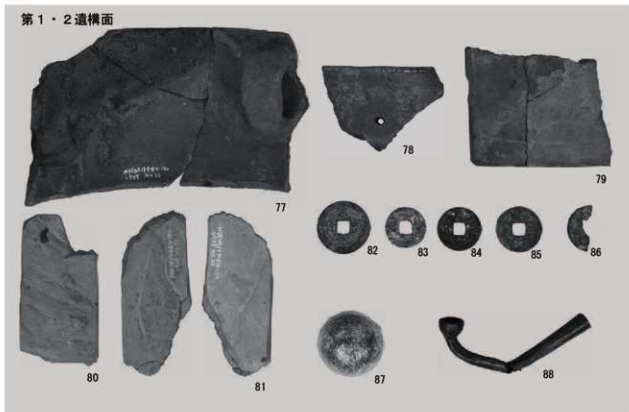




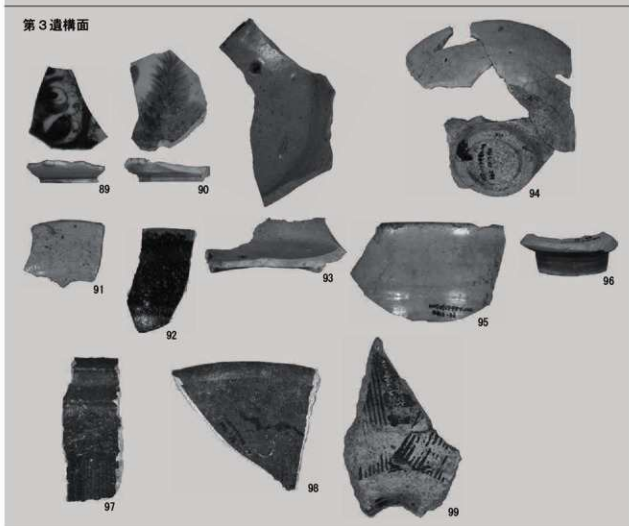
第 1・2 遺構面



第1・2遺構面



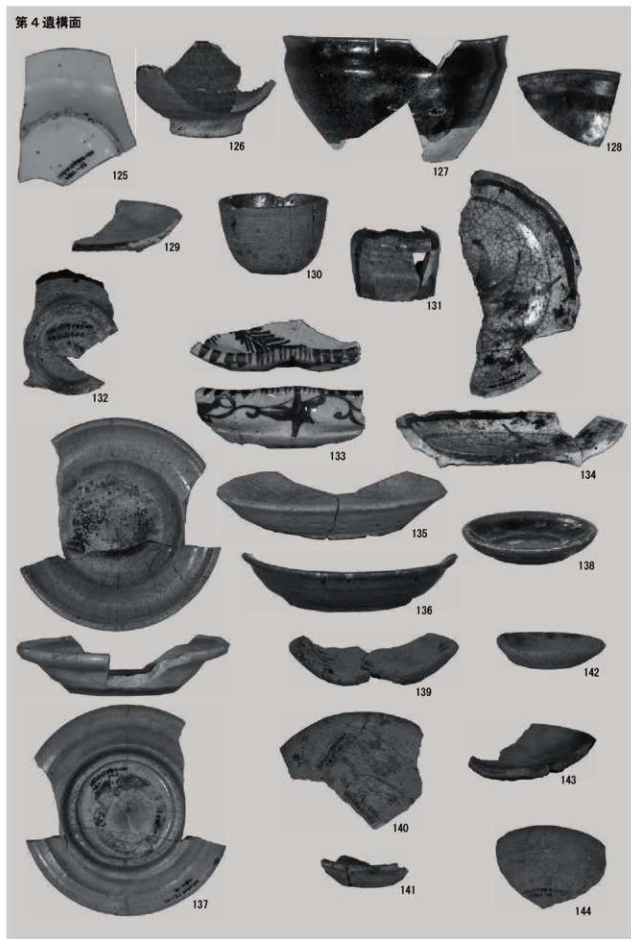
第3遺構面



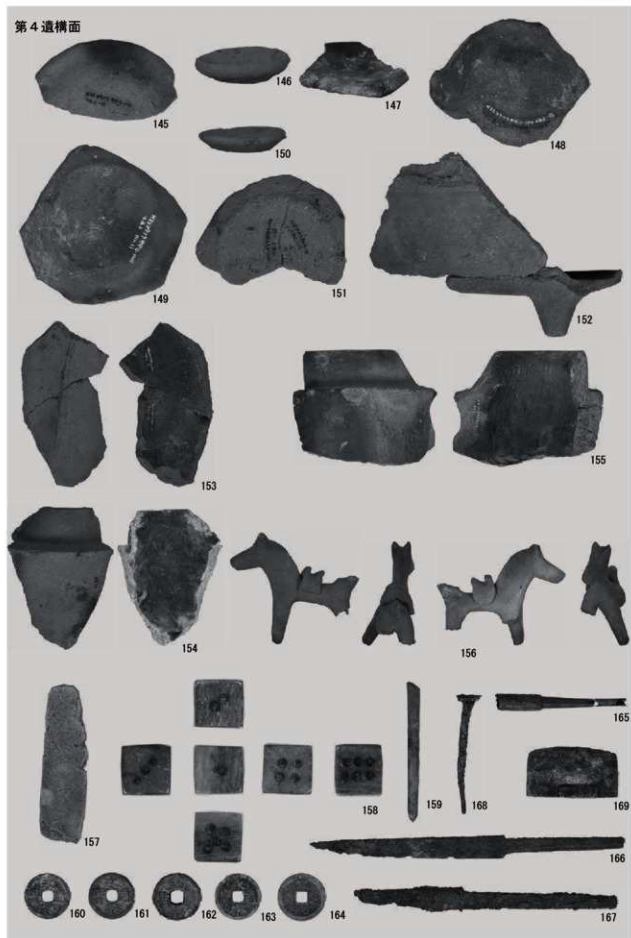
第3遺構面



第 4 遺構面



第4遺構面



図版 18

第5遺構面



170



171



172



174

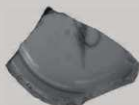


173

調査区



175

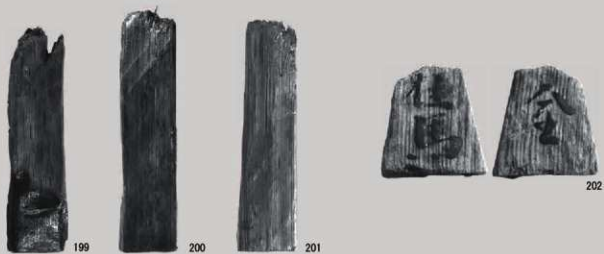
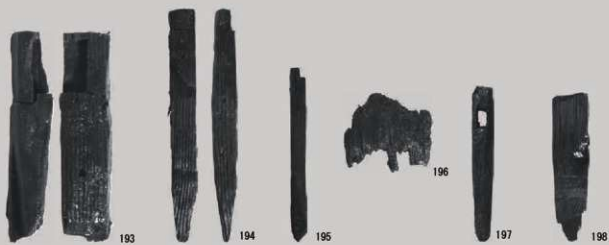


176



177





報告書抄録

ふりがな	こうふじょうかまちいせき							
書名	甲府城下町遺跡ⅩⅢ							
副書名	中央4丁目144他 都市計画道路古府中環状浅原橋線街路事業に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	甲府市文化財調査報告							
シリーズ番号	74							
著者名	平塚洋一・泉 英樹・小谷亮二・藤澤 明							
編集機関	甲府市教育委員会							
所在地	〒400-8585 山梨県甲府市丸の内1丁目18番1号 TEL055-223-7324							
発行年月日	平成27(2015)年 3月13日							
ふりがな	ふりがな	コード		世界測地系		調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経			
甲府城下町遺跡	山梨県甲府市中央4丁目144他	19201	253	35	138	2013.7.29～2013.8.26	60	街路事業
				65	57			
				98	23			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
甲府城下町遺跡	城下町	近世 近代	建物跡・土坑・上水・礎溝	磁器・陶器・土器・瓦・土製品・木製品・石製品・金属製品・骨角製品			「永楽通寶」の鏡文字が刻まれた金属塊や鍍瓦が出土。	
要約	本遺跡は、甲府市中央4丁目に所在する。甲府盆地北縁部の相川扇状地の先端部に位置し、標高は262.6～263.2mを測る。発掘調査では、江戸時代前半の礎石建物跡、甲府上水のもとと考えられる竹樋の他、鍛冶関連遺構と推測されるが跡などがみつかった。							

甲府市文化財調査報告 74

甲府城下町遺跡ⅩⅢ

(中央4丁目144他)

—都市計画道路古府中環状浅原橋線街路事業に伴う発掘調査報告書—

平成27年3月13日

発行 山梨県中北建設事務所

甲府市教育委員会

〒400-8585 山梨県甲府市丸の内1丁目18番1号

TEL055(223)7324 FAX055(233)7331

編集 甲府市教育委員会

昭和測量株式会社

〒400-0032 山梨県甲府市中央3丁目11番27号

TEL055(235)4448 FAX055(235)5665

印刷 株式会社 内田印刷所

〒400-0032 山梨県甲府市中央2丁目10番18号

TEL055(233)0188 FAX055(233)0180